
魔法少女リリカルなのは～Nameless Ghost～（無印編）

柳沢紀雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは（Nameless Ghost）
（無印編）

【Nコード】

N7012V

【作者名】

柳沢紀雪

【あらすじ】

Nameless Ghostシリーズの第一シリーズ（通称無印編）となります。地球に漂流したユーノがジュエルシードの回収のために行動を起こし、そしてなのはと出会う。その出会いはあまりにも唐突で、衝撃的で、なのはの日常はその一瞬にして変わってしまう。（この作品は別サイト（<http://yk2011.blog103.fc2.com/>）にも掲載しています。なお、物語の展開は原作アニメのものと大きく異なりますのでご注意ください

い
)

第零話 P r e m i s e S t o r y

奥深い森の中、獣除けの苦々しい薬草が燻る香りが一面に広がり、目を覚ました彼は一瞬眉をひそめた。

夜明けはまだ遠い。切り分けられた深緑の壁面の中央には既に消えそうになっていた焚き火の跡が、最後の膝りを懸命に奮い立たせている。

「気を緩めすぎかな、こりゃ」

そういつて男は側の細い枝を何本か取り上げ、そつとその上に備えた。小さな赤光がようやく与えられた餌に嬉々としてまわりつき、やがてオレンジの身体を盛大に吹き上げさせる。

これで良しと彼、ベルディナ・アーク・ブルーネスは肩からずれ落ちた毛布を身体に巻き付け、懷から水筒を取り出し少量口に含んだ。

暖を取るために入れてある濃い味の蒸留酒スチリッソのきつい苦みが口に広がり、ベルディナは一つ溜息をついた。

「んん……」

夜の静けさの中、先程通り抜けていった風に頬を撫でられたのか、火の側で毛布にくるまる少年が少し身体をもぞつかせる。

「まだ夜だ、寝てな」

おそらく届いていないだろう声を、ベルディナはその少年に向けた。

少年、ユーノ・スクライアはそれに答えるようにもう一度口を振

るわせ、穏やかな寝息を立て始めた。

ベルディナは、少し肩を落とし一息ついた。

「それにしても、遺跡の発掘を九歳の子供に任せるってのは、スクライアの族長も容赦がないな」

ベルディナはまだ遠い朝日を思いながら、自分と彼がここにいる発端を思い返していた。

スクライア族は遺跡発掘を生業とする種族だ。この世界、ミッドチルダを初めとする時空世界において、彼らの行う仕事は多くの恵みを与えている事は間違いない。

古代遺跡より発掘される古代遺物、アーティファクト、ロストロギアと称されるそれらは、多くの魔法技術と歴史の証拠を残し、社会をより快適に便利にするための足がかりとして利用されてきた。

スクライア族は、少数民族であるが故にそのフットワークの軽さを利用し、様々な世界を流浪する放浪民である。少数民族であるが故に、その民草は生まれた時から何らかの役割が与えられ、部族のため家族のために働くことを強要される。

いや、それは強要ではなく当然あるべき義務と言うべきか。

故に、例えば幼子であっても何か出来る事があればそれを積極的に行う事が求められ、それを負担と感じる者は種族を見渡してもごく少数であることが伺える。

しかし、とベルディナは考える。幾ら才能があり本人の意思があり周りもその二つを認めているにしても、年齢が二桁に至らない子供にこのような仕事を、とすれば命の危険さえもある遺跡の調査

を行わせる事は明らかに行き過ぎではないか。

ベルディナはスクライア族の一員ではない。

外部の流入者でもなく、あくまで客人として立場であるためスクライアの事情に意見を言うことは出来ず、族長が認めた決定を覆す権限も無い。

ならば、せめて側で見守ることだけは許して欲しい。ベルディナは、族長にそう進言しそれは認められた。保護者を気取るわけではないが、少なくともベルディナはユーノの親代わりとして今まで彼を見守ってきた経緯がある。

「何も起こらんといいんだが」

過保護すぎる嫌いがあるとは重々承知しているが、少なくともユーノにはまだまだ保護者が必要だとベルディナは考えていた。

「というよりは、この世界の人間は早熟すぎるってことか。所詮ガキの考えることに任せるってのは、放任主義もきつすぎだ」

そう言っただけベルディナは眠りに落ちるユーノを見つめた。

（しかも、こいつは危うい。全部自分の責任にして、要らん重責を勝手に背負いやがる。誰かが側にいてやらんとな）

ならば、その者が現れるまで自分はその背を見守っていればいいと思い立ち、ベルディナは薄く笑った。それは嘲笑にも似た冷たさの笑みだった。

（今更、全てを捨てた俺が、こうして一人の子供に腐心するってのは笑えるもんだな。年を取はとりたくないもんだ）

時折吹き付ける緩やかな冷風に混じり、野を這う獣たちの気配が漂ってくるが満月もまだ遠く、ベルディナは警戒も浅くしてそれらを見守っていた。

ベルディナ・アーク・ブルーネスは三百年の時を生きる魔術士である。

それを聞いた者の大抵は、センスのない冗談だと一笑するだろう。彼の容貌は、見る者によつてはまだ十代後半か、二十代前半と言えるほど若々しい。

コンパクトにまとめられた細い身体に、肩を軽く撫でる程度に切りそろえられた深海色の髪。身の丈も成人男性より若干低く、整えられた容貌もまるで女性のようにも感じらさせる程だった。

しかし、彼の深い知識や経験によつて裏付けされた行動理念はとも人の一生に集約される粋を超えており、十年も共にした人間なら、自らの成長や老いに比べ、彼がまったく変化しないことに驚き、そしてようやく理解するだろう、彼は、三百年の時を生きる魔術士であると。

ベルディナがスクライアの客人として部族に身を寄せて、既に二十年。その当時赤子だった者達も、今では立派に成人して部族のために働いている。そして、彼はその間、世界の変化に取り残されたかのような停滞を続けている。

（そろそろ、潮時か）

とベルディナが感じるのは、その停滞を不審に思う部族の者達と自身の間に垣根が生じ始めていることにも起因する。

（この発掘任務が成功すれば、ユーノは正式に成人として認められる。俺の思惑がどうであれ、成人した男をいつまでも保護している

わけにもいかないか)

次第に足音が聞こえるほどに近づいてくる別れの気配にベルディナは少し感傷を感じながらも、やはり名残惜しさを感じていた。やはり、家族と離れることは辛い。しかし、時期を逃せば、自分が原因でユーノが部族の中で孤立してしまいかねないのも事実だった。

「まったく、何度繰り返しゃ気が済むのかね、俺は」

ベルディナの言葉は、白く煙る吐息となり静寂の森の中へと消えていった。

目を覚ました少年、ユーノ・スクライアは身を切る寒さに一瞬身体をきつく震わせた。

《おはようございます、マスター。昨晚はよく眠れましたか?》

どこか機械じみた女性の声がユーノが抱える毛布の中から聞こえてきた。

「うん、少し寒いけど。大丈夫だよ」

《何よりです》

ユーノはその声に少し微笑み、ゆっくりと身体を起こすと首にかけられた赤い宝石を取り上げにっこりと笑った。

「おはよう、レイジングハート」

先程まで彼と言葉を交わしていた声の主、レイジングハートと呼ばれる宝石は答えを返すように何度か光を明滅させた。

「起きたか」

楽しそうに会話をする二人に、ベルディナは声を掛け、ユーノに暖めた珈琲を手渡した。

「おはよう、ベルディナ」

《おはようございます、前所有者ベルディナ》

レイジングハート共にユーノはそう答え、珈琲を受け取った。

「ああ、おはよう、ユーノにレイジングハート。今朝はちよつとばかり冷えるな」

ベルディナは朝の冷気に湯気を立てる珈琲を飲み干し、読んでいた本を懐にしまった。

《ベルディナ、マスター・ユーノ、本日の予定を》

一通り朝の挨拶を交わした二人を見て、レイジングハートはそういうとこれからの行動の確認を要請した。

レイジングハートは、ユーノが持つ赤い宝石、デバイスと呼ばれる奇跡を体现する装置に他ならない。それは、極めて高性能な演算装置を有し、使用者と意思疎通を行う人工知能が搭載された武器と
マスター
いってよい。

時空管理局を始め、魔法と呼ばれる技術によって成り立つ文化圏において、魔法とデバイスは切り離すことの出来ない関係にあり、多くの複雑な術式を使用者を代行し行う道具である。

ユーノはレイジングハートの提案に軽く頷くと、腰のポーチにしまわれていた小型端末を取り出し空間にモニターを投影した。

「これから行く場所は、既にあらかたの発掘が終了している場所なんだ。言ってしまうえば、今回のこの調査は最後の締めと言ったらいいのかな。この遺跡は確かに発掘され、調査が終わったと言うことを確認するのが目的だね」

ユーノの話す内容は、モニターに投影された資料を要約したものだった。その資料にはいつ頃この遺跡が、誰の手によって発見されいつ頃から発掘作業が始まり、スクライアに依託された時期やその経緯、経費など事細かい文章と数字が示されている。

「まあ、言ってみりゃ契約書にサインをするってことだな。楽といえば楽な仕事か」

スクライアに随行してこの遺跡の発掘を一から立ち会ってきたベルディナにとって、あれだけ難航した作業の最後がここまであつけないものである事は、ある意味拍子抜けのように感じられたのかも知れない。それは、ユーノも同じ事だろうし、スクライアも同じ事を考えていることだろう。

普段は生真面目で、必要なほど慎重であるはずのユーノが随分とリラックスして話することからそれは伺える。

「といっても、気を緩めていいって事じゃないからその辺はわきまえてよ？」

「俺が油断するって？」

「ベルディナに言う言葉じゃなかったね。失礼」

「まあ、いいんだけどもよ」

そういつてベルディナは、固形食品を口に含み朝食を取り始めた。

《油断大敵です。気を引き締めましょう》

レイジングハートの正論らしい正論にベルディナは肩をすくめると、ちぎった干し肉をユーノに投げ渡し珈琲をつぎ直し一気に飲み干した。

「とりあえず、詳しい打ち合わせは朝食が終わってからだね。それでいい？」

ユーノは顎が痛くなりそうなほど難しい干し肉を難なく噛み千切り、咀嚼しながら確認した。

「ああ、そうだな」

《マスターの仰せのままに》

ベルディナとレイジングハートの了承を得、ユーノ達は本格的に朝食を取ることにした。

「ところで、あの遺跡の奥はどうなってんだ？」

火を熾おこしなおし、石で組まれたかまどで簡単な調理を行いながら

ベルディナはふと思ったことを聞いた。

「あれ？ ベルディナは奥まで行ったこと無かったっけ？」

煉瓦など上等なものが得られない以上、そのあたりに落ちている手頃な石を積み重ねただけのかまどは酷く立て付けが悪く、インスタントのスープを混ぜるにしてもいちいちふらつく鍋を押さえておかなければならない。

ユーノはいまいち慣れない作業に苦辛しながら、視線だけベルディナに向け、問い返した。

「発掘の邪魔になるからな。俺が知ってるのはせいぜい奥の間の…馬鹿みたいに広いダンスホールまでだな」

「あー、それじゃあ殆ど重要なところは見てないって事か」

ユーノはスープの味を確かめながら、保存のために乾かされた食材を適当に鍋に投入し味を見た。

そして、少しだけ塩を加えながら遺跡の全容を頭に浮かべた。

《奥の間の先は深いシャフトとなり地下に通じています。その先には蟻の巣のように複雑な経路が何本も下に伸びており、その最下層にある広間には祭壇が設けられていました》

忙しいユーノに代わり、レイジングハートが丁寧な口ぶりでその概要を説明する。

「なるほど。まるで大樹の鋳型だな、どれだけ大きい？」

「そうだね。だいたい、小さな丘一つ分ぐらいの規模はあるよ。ち

なみにご明察、この遺跡の名前は h u k c u b g e d p q
i i 古代語の直訳で 大木の型穴 という意味だよ」

《そのままですな……》

「w n i n o h i r n u y r w n i g u c y (名は体を示す)。分かり易くていいじゃねえか」

ベルディナは焼き上がったベーコンを鉄皿にわけながら肩をすくめた。

「そうだね」

ようやくスープの味付けに満足したのか、ユーノも鉄の椀を二つ取り出しスープを注ぎ込んだ。

《私は改名を提案します》

その名前が気に入らなかったのか、レイジングハートは益体もない提案をし、二人はそれを却下した。

「それじゃあ、食べよう」

無神論者の多いスクライアらしく、ユーノは特に何の祈りも捧げずに黒パンにベーコンを挟み込み小さな口でそれを頬張った。

「だな、聖王陛下に感謝を」

ベルディナは略式とはいえ、ベルカの聖王への祈りの言葉を口にするとまずはスープを口に含み、いい味だと賞賛の笑みを浮かべた。

《私の分はないのですか？》

「食えるもんなら食ってみやがれ石コロ」

ベルディナは元々の所有者として、レイジングハートの教育を間違えたかもしれんと嘆きながらパンをスープに浸した。

その祭壇は、それが安置された部屋の広さに比べれば実に簡素な造りをしていた。

大きな岩を削り、中を加工し装飾を加えその外周も見事な造形を生み出していたが、古代遺産としては比較的ありきたりなものではないかとベルディナは感じた。

「もう中のもんは運び出したんだっただか？」

祭壇の内部は石造りのテーブルが設えられており、その中央には小さなくぼみが見受けられる。おそらくそこに大小なりの球が置かれていたと推測できるが、今は既に空白となっている。

「スクライアの保管庫にあるよ。古い時代の記憶装置のようなものだったらしい。解析には随分時間がかかるらしいけど、それが終わったらこの文明の歴史が大きく書き換わるかも知れないね。今から楽しみだよ」

考古学者にとって最大のプライズは、物的価値よりそれに込められた情報だ。おそらく、ユーノや大抵のスクライアにとっては情報が満載した遺物は極上の料理や莫大な財宝以上の価値があるのだろ

うと予想できるが、所詮学者とはまるで縁のないベルディナにとっては拍子抜けもいいところだと思わざるを得ない。

「てつきり、時価数千万ミッドガルドの財宝が眠ってると思ったんだけどな」

我ながら随分と即物的な事だなとベルディナは苦笑するが、やはり、肩すかしを食らわされた意趣返しとしてはこの程度は許して欲しいと願った。

「そんな都合のいい夢なんて、陽子の崩壊を観測するようなものだよ」

一攫千金を期待しては発掘など続けられないとユーノは含ませ、横目でベルディナ見上げて、どこか不適に目を細めた。

確かに、それほどの価値のあるものが次から次へと発掘されるのなら、今頃スクライアは発掘のためのスポンサー探しに腐心する必要はないだろう。

ベルディナは、ユーノ達スクライアがどうしてそこまで遺跡などと言うものに執着できるのか、二十年間行動を共にしても理解できなかったが、ユーノの瞳には一切の嘘は含まれていないことだけは分かっていた。

「考古学は金にならねえ学問か。フィールドワークに何十万ミッドガルドもかかるってのは笑えねえ冗談だ」

情報がものを言うようになった近年の社会であっても、重宝されるものは未来に関する情報のみで、既に忘れられ埃をかぶってカビを生やした過去の情報などに金を出すものは少ない。

未来へと向かう情報は手に入れるためのコスト以上の莫大な利益

をもたらす。

社会が求めるものは知識ではなく利益であり、考古学者が必要とするものは、利益ではなく知識なのだ。

「世知辛い世の中になったな」

やはり、なかなか理解できないものだと思いつつ、ベルディナはそう呟いた。

「発掘できるだけましだよ」

《私は快樂よりも利益を優先したい》

二人はレイジングハートの戯言を華麗に無視すると、祭壇の事後調査に入った。

「とりあえず、僕達のすることはどこか調査が不足しているところはないか、不審な箇所や残しておく危険な物は無いかを確かめることになるよ。ベルディナは周囲全体を魔力走査で、僕は細かいところを目視と魔法で調査しようと思うんだけど……それでいい？」

「問題ない。だが、広域搜索はお前の方が得意だろう。役割を交代した方が良いと思うが？」

《つれないですね》

ユーノの首にかけられた赤い石コロが何かを呟いたが、二人は <ruby>>rb<空耳>rt<ノイズ>/ruby<として処理し、打ち合わせを続けた。

「確かに、僕の方が得意だけど、この辺りは兄さん達があらかた調べ尽くしてくれたから。系統の違う術者がするほうがいいとおもうんだ」

「それもそうか。だったら、さっさと終わらせて上に戻ろう。どうもここは寒気がする」

「それは同感。じゃあ、レイジングハート。いつも通り補助とログ取りをお願い」

《ようやく出番ですか、お任せください》

ホッとしたようなレイジングハートの声に肯き、ユーノは慎重な目つきでまずは床を眺め回りながらけっして狭くないフロアを練り歩き始めた。

（生真面目なやつだな）

ベルディナは床にはいつくばるように腰をかがめるユーノを一瞥し、何となくそんなことを思ったが、今は自分の仕事をする時間だと割り切り、感覚を鋭くときすまし身体に流れる魔力の渦に意識を移した。

身体の全体を駆けめぐる神経をイメージし、極めて高性能に効率に最適化された回路を感じる。

ユーノ達が普段扱う魔法、ミッドチルダ式と呼ばれる魔法は、体内に存在するとされる魔導器官であるリンカーコアにより魔力を生み出す。そして、生み出された魔力をレイジングハートといった外部の装置に流し込むことでそこにプログラムされた効果付随させるのがミッドチルダ式魔法の基本運用方式だ。

時折、ユーノのようなデバイスを用いることなく高度な魔力制御を行う者もいるが、扱う魔法の体系自体はまったく変わらない。

魔法を発動させる際に発光する魔力光、足下に現れる円形を基調とした演算陣。この二つがミッドチルダ式魔法の大きな特徴となる。しかし、ベルディナが感じ取る魔力の動力源はリンカーコアではなく、魔術を発動させたとしても燐光を発する円陣が足下に現れることはない。

ベルディナは目を閉じ、体内で組み上げられた方式を外部へと発動させるべく弁を開いた。

（構造は、シリコンを基調とする通常の岩石。視覚との齟齬は見受けられない。内部の走査開始）

周囲の情報が神経を通して脳へと流れ込んでくる。それに意識的なフィルターを掛け、必要な情報のみを拾い集めていく。彼が行っていることは、魔力を照射してその反射波を読み取る作業ではなく、周囲の環境が自ら発生させる情報を読み取ることでスキャンを行うという作業だ。

アクティブではなくパッシブ。殆ど無意識のうちに採用しているこの方式は、自ら魔力を外部に放つことなく走査することで隠密性を高める。その代わり、得られる情報は莫大となり、その取捨選択を誤れば必要とする情報が得られないどころか、膨大な情報量の前に意識を失う危険性もまた存在する。

しかし、長年扱い続けたこの技術を、今更ベルディナがし損じることなどあり得ず、彼は割と余裕を持って周囲の環境の情報を次々と脳に送り込んで捨てる。いく。

（内部構造も変わらず。データシートと比較。問題な……ん？）

ふと、気になる事があり、ベルディナは目を開いた。

「なあ、ユーノ。あの祭壇の向こう側には何かあるのか？」

ベルディナは、スキャンを続行しつつ、床にはいつくばるようにそこを調べ回るユーノに一言声を掛けた。

「祭壇の向こう？」

ユーノは立ち上がり、データシートを確認した。

「何もないはずだよ？ 発掘はここで終了しているね」

ベルディナは「そうか」と答え、自分の勘違いかもしれないと考え、再び目を閉じそれに意識を集中した。今度はパッシブのみではなくアクティブによる走査も組み込み、そして確信した。

「ふーん、だったら、調査不足を発見つてとこか……」

ベルディナのつぶやきにユーノは目を見開き、足早にそこへと向かうベルディナの背を追いかけた。

そして、ベルディナは祭壇の間の入り口から反対側にある岩壁に手をつき、直接それに魔力を流し込み念入りの調査を開始した。

「僕には、何も見えない」

ユーノも念のため、自身の搜索魔法を立ち上げベルディナが触れる隔壁に対して断層走査を行ってみた。しかし、ユーノの走査では僅かな差異を感じることは出来ても、それが異常なのか単なる測定誤差なのかを判別することは出来そうにもない。

「幻惑の魔法か。ミッド式の魔法では、ここに何かがあると分かった上でよっぽど念入りに時間を掛けて走査しなければ分らない構造だな」

ならば、とユーノは疑問に思う。

「なるほど、だからベルディナには分かったんだね」

「そういうことだ。俺の術なら幻惑に引っかからない」

そもそも、ミッド式とは異なるんだからな。というベルディナの説明に、ユーノは頷いた。

ベルディナが使用する”アーク式”と呼ばれる魔術は、遙か昔、新暦が始まるよりもさらなる昔、現代では旧世代としか言葉が残されていない時代に発祥した魔法を動力とする技術を源流としている。それは、ミッドチルダ式魔法の源流が発生したところには、既に滅び去ってしまった技術であるほどその歴史は古く、同時にそれは現代魔法とはまったく異なる理論によって構築されている。

「やっぱり、ベルディナと一緒に来てくれてよかったよ。危うく見逃すところだった」

ベルディナは走査を一旦終え、だいたいの構造を把握すると、腕を下ろしユーノと向き合った。

「さてと、どうする？ 発見した以上無視することは出来んが、これは魔法に対しては鉄壁の隠蔽能力を持つてるわけだ。これじゃあ盗掘者おいそれと見つけることはできないだろうし、発掘終了にしまえばこの遺跡の価値も下って誰も見向きしない。違うか？」

つまり、これはこのまま放っておいても問題ないとベルディナは言いたかった。

「だけど、僕は無視はしたくない。この先に隠された何かがあるのなら、それは歴史的な発見だと思う」

「だが、ここまで強固に隠すということは。何か拙い物。それもとびきり上等な厄介物が埋もれてるってことだ。茂みに石を投げて虎を呼ぶかもしれんぞ」

ユーノは暫く口を閉ざし、目を閉じ意識を思考へと沈み込ませる。何を考え、どのような思考経路をたどっているのか。論理的、倫理的、感情的、理性的。そのあらゆる蔓を通し、ユーノは結論を出した。

「スクライアがロストログアを前にして手をこまねいている道理はないよ。やろう」

ベルディナは、「そう来なくっちゃな」といつてにやりと笑った。

《応援を呼びますか？》

レイジングハートの提案はもっともだった。この先何があるか分からない状況では、この人数では圧倒的に不足する。しかし、即座に応援を呼ぶわけにもいかなない理由がユーノにはあった。

「スクライアの応援が来れば、ベルディナが関わりにくくなる」

ユーノは予感していた。この先には何か、とんでもない物、それ

こそ多くの運命の道をねじ曲げる程の力を持つ物が隠されていると。それがもしもスクライアだけの手で行われるとすれば、それは可能なのか。

（僕達では異常にも気づけなかった。だから、この先の調査にはそれこそ五感を絶たれた暗中模索が強いられる。だけど、ベルディナなら闇に光を投げかけることが出来るはずだ）

「レイジングハートは、族長に応援を要請して。僕達は、現場主任の権限で先行調査を行う。なるべく驚異は排除しておかないと」

現場主任の権限が何処まで有効になるのかは、それこそ現場の判断にゆだねられることが殆どだ。しかし、それでも踏み越えられない境界は存在し、その線引きを何処までかすめることが出来るかが大きな課題だ。

下手にその線から向こうに足を踏み入れてしまえば、例え同族であつてもいや同族だからこそそのペナルティーは大きく、最悪部族追放という憂き目を見ることにもなりかねない。

「とにかく慎重に、冷静に行こう」

ユーノはベルディナとレイジングハートを見つめた。

「分かったよ。任せな」

《Yes, master》

そして、二人と一個の孤立無援の発掘が始まった。

スクライアの増援が到着したのは、それから3日後のことだった。あれだけ念入りに調査したにもかかわらず、調査に不備があったという報告を聞いた一族は驚愕し、すぐさま担当した調査団に腕利きのエース達を交えて人員を送り込んだ。

久々の大部隊のお出まじだとユーノは心なしかつきつきと待ち遠しそくに調査を進めていた。

「よう、ユーノ。なんかどえらいもんを見つけたんだってな。さすが俺の愛弟子なだけはあるぜ」

調査団を率いるその男は、豪快な笑い声を上げ茫然と突っ立っていたユーノの背中を乱暴に叩いて言った。

「ゾディット兄さん！ まさか、貴方が来るなんて。族長は本気なんですな」

そんなユーノの憧れの眼差しを一手に受け取る男、筋肉質で肌は赤茶け、ゴツゴツとした顎にはやした無精ひげををなでつけながら、ゾディットは不敵な笑みを浮かべた。

「可愛い孫のためなんだろうよ。あの爺さんもよっぽど子煩悩だからな」

ゾディット・スクライア。スクライアの切り札、発掘護衛隊のエースにしてクラナガン大学考古学部名誉会員の名を持つ凄腕は、間違いなく彼のプロフィールだ。

「ベルディナの旦那も、ご苦労様でした。どうです？ こいつは、役に立ちましたか？」

ユーノを思うゾディットの表情は、まるで自分の息子を自慢する父親そのものだ。ベルディナもユーノ父親代わりの一人としては、思わず笑みを浮かべざるを得なかった。

「完璧だ。こいつは、いい発掘屋になるだろうな」

二人は妙な連帯感と共にサムズアップで挨拶を交わし、ユーノは現場主任移行の手続きを取ろうとゾディットの腕を取った。

「それで、これ以降の調査ですが……」

というユーノ言葉にゾディットは驚くべき言葉で、それも不適に華麗にサラッ流すような口ぶりですそれを発した。

「爺さんからここはお前に任せるって聞いてる。いよいよ、俺もお前の部下になるわけだな。よろしく頼むぜ」

目をまっさらに見開きながら瞳孔を針の先程に縮めるという器用な表情を浮かべユーノはそれから二十分間その場で硬直していた。

実際の所、発掘は何の問題もなく進められた。それは、凄腕のゾディットが現場にすることで調査団員の士気が高まったことも理由としては大きい。何よりも特筆するべきはそれらを完璧な指揮の下に扱いきったユーノの手腕だろうと、ベルディナは親のひいき目を僅かに交えてそう思った。

通常の搜索魔法では秘匿されていたその隔壁は確かにやつかいな箇所が多くあったが、ユーノはその殆どをベルディナの入念な調査によって把握しており、そこから立ち上げられた発掘手順は誰の目から見ても完璧の一言尽きた。

ユーノには優秀な部下と優秀なアドバイザーであるベルディナが付き、このメンバーで不可能なことはこの次元世界の誰にも出来ないと言わしめるほどのものだった。

そして、最後の隔壁。その向こうから流れ込む酷く冷涼な魔力波動を前に、最後の一撃が入られることとなった。

「それで、いいのか？　ここに俺がいて」

その隔壁を前にして魔法杖を構える男達を左右に控えさせ、ベルディナはユーノの隣でその最前線に立っていた。

「もちろん。この発掘はベルディナのおかげで進んだようなものだからね。僕はいてほしいな」

「そういうことです。まあ、それに関係者立ち入り禁止の看板ははねえんだし。客人といっても旦那はスクライアの一員には違いありませんぜ」

ユーノとゾディットの言葉に、その現場にいる誰もが深く頷いた。

「まあ、俺も興味があるから願ったり叶ったりなんだがな。意外に緩いな、スクライアの慣習つてのも」

その緩さがあるからこそ、ベルディナは長年スクライアに逗留してきたことも事実だった。やはり、この一族は自分の肌にあう、とべ

ルディナはしみじみと実感した。

「恩義には恩義で報いをだよ、ベルディナ」

「別に恩を売った覚えはないんだがな」

ベルディナは照れ隠しに肩をすくめ、左右に控える隔壁破壊要員に目を向けた。

「それでは、ユーノ現場主任。隔壁破壊を許可していただけますか？」

彼らはまるで儀式のようにユーノにそう伺いを立てる。

「現場主任、ユーノ・スクライアの名において許可いたします。過去の英知は我らにあり、それらは全てスクライアに集約されるべし」

それは、儀式なのだ。ベルディナは初めてそれを見た。

そして、少し前にスクライアを持って無神論者と称したことを修正するべきだと考えた。

彼らは、神を信仰していないだけで、遺跡を古代の英知をその崇拜対象にしているのだ。

「スクライアの民に栄光を。バンカー・バスターー！！」

瞬時に現れる魔法陣、二人の男が掲げる手のひらから一握の光が発せられ、それは隔壁につけられた印に寸分の狂いもなく着弾し、小爆発と共にそれは崩れ去った。

隔壁破壊魔法【バンカー・バスター】、スクライアが伝統的に受け継ぐ古い物体破壊に特化したミッド式魔法だ。

力加減、着弾後の崩落面積。それらは予め計算に入れら、記されたラインを正確に保持し、その先に広がる光の部屋のボールを剥いだ。

それは、部屋全体が光で出来ていると称しても何ら疑問が浮かばない光景だった。

優しさも無く、神秘もない、薄暗さも邪悪さも何も感じさせない、それは正に純粹な冷涼さを発する燐光と称することが出来る。

広く、限りなく真球に近い形で切り開かれた大広間には目を見張るような装飾も、崇拜するべき神の肖像も何も記されていない。

そこは、鏡面に近いなめらかさを備えた白塗り壁殻に被われた広間だった。

そして、その中心。祭壇とも言えるそこに浮かび上がる21の蒼く光る宝石はまるでこの時を待っていたかのような歡喜にうちふるえているように思えた。

そして、ベルディナは戦慄を覚えた。何故、こんな物が、これ程の数が今まで誰の目にもとまらずここで眠っていたのか。

純粹な魔力の結晶。ベルディナであっても、噂程度にしか知り得ない古代の英知の塊がそこにあった。

「 ジュエルシード 」

ユーノの口から吐き出されたその言葉は、静寂の空間に鈍く響き渡った。

ジュエルシード。それは、意識のある宿主に寄生し、それが内包する渴望を強制力を持って叶えてしまう古代遺失物だ。

それだけを聞けば、様々な絵本や童話に登場する願いを叶える素

敵な宝石で終わっていただろう。しかし、問題はそれが内包する莫大な、ともすれば時空間さえも脈動させるほどの莫大な魔力だった。魔力は概念的なものであり、それは発動させれば方向性を持った純粋なエネルギーとして発揮される。

仮の話しよう。

もしもその魔力を物質化出来たとして、手のひらに載せられる程の小さな物質を形成するためにはいったいどれほどの魔力が必要となるか。

質量はエネルギーであり、人間一人分の質量が全てエネルギーに変換された場合、その威力は惑星一つを容易に崩壊させるほどのものであると言われている。

また、物質化された魔力は質量物質に比べ圧倒的に状態が不安定であり、僅かなきっかけでその魔力は容易にエネルギーへと変換されてしまう。

ジュエルシードとは即ちそういうものののだ。

それが一つあれば、いかに巨大な都市であっても一瞬で全てが蒸発してしまうだろう。さらには、その余波によって発生する次元震によってその世界そのものの存亡の危機が訪れる可能性さえ否定できない。それほどに危険なものが、彼らの前には21個もの数が揃えられている。

ベルディナは息を飲み込んだ。

「どおりで念入りな封印がされているわけだ、俺たちは石を茂みに投げて虎どころか、魔竜をよんじまったらしいな」

そんなベルディナの軽口に答えられるほど余裕のある人間はそこには一人もいなかった。

「後悔してるのか？」

輸送船のシートに腰を下ろし、何時まで経っても顔を上げようとしない同乗者にベルディナは声を掛けた。

「うん。僕があれを発掘しようなんて言い出さなければ、あのままベルディナの言葉に従っておけばこんな事にはならなかったんだ。これは、僕の責任だよ」

ユーノは、そういつて再び面を下げた。

「そういうなら、最初から俺が見つけれなければこんな事にはならなかったはずだ。わざわざ魔術探査を掛けなくても魔法探査で十分だったはずだ。つまりこれは俺の責任ってことで手を打つ気はないか？」

まるで値切りの交渉をするかのような気楽さでベルディナは両手を掲げそう提案した。

「そんな、探査を頼んだのは僕の方だし。やっぱり僕が悪いんだよ」

「だったら、お前の調査に無理矢理付いていった俺にそもそも原因があるって事でどうだ」

「ベルディナの随伴を許したのは僕だ」

「だが、最終的な許可は族長の判断だ。お前の判断じゃないし、族長が否と言えばついて行けなかった。違うか？」

「それは、違わないけど……それでも、やっぱり他人のせいには出来ないよ……!」

ベルディナは頑なな態度を崩そうとしないユーノに半ば呆れ気味に溜息をついた。

（他人のせい、か……）

ベルディナは若干諦めのこもった視線をユーノに向け、目を細めた。彼は落ち込むあまり、ベルディナの視線に気がついていない。

（だがな、ユーノ。他人のせいには出来ないって事は、スクライアは所詮自分にとっては他人だって言っているのも同然になるぞ？ お前はそれに気がついてるか？）

それは、決して口にしてはならないことだった。ユーノはスクライアに対して負い目がある。通常一般的な感性からしてみれば、なんだその程度と考える程のものだったが、ユーノにとっては生きる手だてとも言えるものだ。ベルディナは感じている。

ユーノは正式にはスクライアの人間ではない。ユーノは孤児だ。そして、ベルディナに拾われ、その伝手でスクライアになった。

つまり、ユーノは自分を受け入れ、育ててくれたスクライアに過剰とも言える恩義を感じているのだ。その故に、スクライアの者達を本当の身内とは感じてないのだろうとベルディナには思われた。故に、無意識からだされる言葉の端々には自分はスクライアの人間ではないという印象を醸し出してしまふ。

（まあ、とにかく）

と、ベルディナは貨物室に通じるスライドドアに目を向けた。

（封印は万全で、時空管理局の輸送船を手早く手配出来た。ちょっと警備が緩いが……この高速船なら問題ないだろう）

ベルディナは楽観的だった。後悔するほど楽観的だった。

「まあ、とにかく俺たちの仕事はこいつを管理局に届けりゃあすむわけだから、そう落ち込むなって……」

ベルディナは、席を立ち、ユーノの肩をぽんぽんと叩いた。

そして、運命は扉を叩いてやってきた。

それは突然だった、一瞬の出来事のはずがどういうわけか時間が緩慢になったかの錯覚を抱くほど、それはずいぶん長い一瞬に感じられた。

突然にして船内の照明が赤く切り替わり、エマージェンシーの言葉とけたたましいアラートが鳴り響き、そして、船体全域を包み込むほどの爆音と衝撃、振動が襲いかかった。

（拙い……！！）

船外殻を突き抜けてくる紫の閃光があつという間に内壁面を駆けめぐり、放電する雷の末端がまるでまとわりつく蔓のごとく内部を蹂躪する。

（くそつたれめ！！）

ベルディナは悪態を口にする暇もなくただ守らなければと考えた。それは、間違った判断だった。ベルディナが本来行わなければならぬことは、ジュエルシードの確保であつたはずだった。しかし、

彼は選り間違えた。その選択の中にはジュエルシールドの存在も、ベルディナの存在も含まれていなかった。

ベルディナは、腕を掲げ、体中を網羅する神経に魔力を無理矢理流し込み、そして、その甲殻でユーノを包み込んだ。

これがいったいなんなのか。天災なのか人災なのかそれすらも考へる暇もなく、彼は自らが行える最高硬度の防御結界でユーノを囲い込んだ。

そして、その内部にはベルディナ本人の姿は存在しなかった。

紫線の末尾が体内に侵入する。痛みが身体を突き抜けるよりも圧倒的な速度でそれは体中を蹂躪し、神経を細切れにし、骨を砕き、臓器を吹き飛ばし、脳を暴食した。

まるで、圧倒的な快楽の渦が彼に襲いかかりそして、彼の意識は何かに引きずられるかのように白い世界へと飲み込まれていった。

ただ意識を失う事とはわけが違った。光の矢の如く迫り来る先に見える、明確な死を彼は確かに見て、それでも彼の心は穏やかだった。

腕の中で目を見開き、何かを訴えようと唇を>ruby<>ruby<戦慄>ruby<わななか>/ruby<せるユーノの熱が、何故か腕を通して感じられる。

（そうか……俺でも、守れるものはあったか……。随分、時間がかったが……これが最後なら、後悔はないな……）

急激に閉じていくすべての感覚はまるで穏やかなゆりかごに落ちていくように思われ、ベルディナはそつと目蓋を閉じた。

蒼い光がすべてを包み込み……ベルディナはそのあまりにも長かった命を終えた……。

気がつけばそよ風の感触と草と土の香りが鼻孔をくすぐった。ここは何処だろうと、まず思った。自分はいったいどうしたのだろうと、次に考えた。そして、あの後いつたいたったのだろうか、想像した。

そして気がついた。思い出してしまった。自分が何故、どうしてあの状況から命を繋いでいるのか。

体中が苦痛にゆがんだ。間接がきしむ、筋肉が萎縮する、骨が悲鳴を上げる。しかし、彼の心はまるで壊れてしまえと言わんばかりに悲鳴を上げ続けていた。

ユーノ・スクライアは身体をよじり、足を抱え込みただうちふるえた。その事実を抹消したくて、否定したくて、しかし、認めてしまった、理解してしまった。

「僕は、ベルディナに。ベルディナは僕のせいで……」

最後の瞬間が何度も何度もフラッシュバックする。いつも側にいてくれた彼が、飄々としながらも冷静に自分を見つめてくれた彼が、親代わりとして様々な事を教えてくれた彼が、自分を守り、自らはじけ飛んだその瞬間。

ユーノは頭を抱え、すすり泣くように身体を震わせた。

（誰か……誰か助けて……誰か……助けて……）

その願いは誰に届けられるのか。

ユーノの胸元で紅く光る宝石はただ澄み渡る青い空を見上げ、た

ルーヴィス
だ一言と呟くばかりだった。

第97管理外世界、現地において「地球」と称されるその地域は、穏やかな初夏の陽射しに包まれていた。

第一話 Critical Encounter

『誰か……誰か助けて……誰か……助けて……』

その声は、突然届けられた。

「……!!」

そして、少女は弾かれるように上体を起こし、まるで血流が溢れ出しているかのようにドクドクとわめく胸を押さえながら、ベッドに蹲った。

「はぁ、はぁ……な、なに？」

少女 高町なのははそう呟きながらようやく治まった鼓動の代わりに粗い息を吐きながら、まだ暗い部屋の中を見回した。

「夢？」

光のない部屋の中。目覚めるにはあまりにも早く、春の終わり、夏の始まりであるはずの時期にしては、空気が酷く冷え込んでいるようにもの思え、なのはは肩を抱き背筋を振るわせた。

「あの声……すごく、悲しそうだった」

おそらく夢の中で聞いた声は、まるで、身を引き裂くかのような、悲痛な叫びだった。

「あの子……だれなんだろう……」

痛いほどの鼓動も晴れ、寝汗に濡れる背中を気持ち悪く重いながらもなのはもう一度布団に背中を預け、そして、若干ながら記憶に残る、夢の中のことを思い起こしていた。

そこは暗い森の中だったように思われた。そこに立つひとりの少年と彼に襲いかかる真つ黒な影が寄り集まったかのような塊。

あまりにも現実味の無い、しかし、夢に見るおとぎ話だとすればあまりにも生々しい。

しかし、印象に残る、凛々しくもあり弱々しくもあり、そして危うさに満ちた翡翠の双眸を思い出し、なのはは何となく頬を染めた。

「……かつこよかったなあ……」

もう一度あの子の夢が見られるだろうか。なのははそんなことを思いながら、次第に湧き上がってくる穏やかな眠りに身をゆだねた。

夕日に照らされて真つ赤に燃える空を見上げながら、なのはは何となくため息のような欠伸をつき、今日はなにやら身の入らない日だったと思い浮かべた。

「あんた、何か今日はだれてるわね」

どこか惚けたような様子でブーツと空を眺めるなのはを、隣を歩く彼女の親友　アリサ・バニングスが彼女の背中をぼんと叩いた。

「あ、うん、なんだか変な時間に起きちゃって……はふう……」

そういつてなのは口に手を当てて小さくあくびをついた。あの後、二度寝と言えるかどうか微妙な眠りの中には、早朝に見た夢をもう一度見ることは出来なかった。

目覚ましのアラームが鳴っても何とな、それを残念に思い、ボーッとして朝を迎えて以来なのは身の入らない一日を送ることになったのだ。

「なのはちゃん、ひよつとして五月病なのかもね。気をつけないと大変だよ？」

そんななのはの様子に同じく親友の月村すずかはクスクスと笑いながら、どこかぼんやりとした夕焼けの道をゆつくりと歩いていった。

とりとめのない会話が続いた。それは、今日の授業の内容であったり、抜き打ちテストには辟易したことであったり、昼休みに話し合った将来就きたい仕事の事であったり。そのたびになのはが眠そうにしていって教師に注意されることがたびたびあったことをからかわれ、なのははこんなに穏やかな日々がずっと続けばいいと、年相応ではないことを何となく思い浮かべていた。

あるいはそれは、彼女の持つ莫大な力故の予感だったのか。運命とはとても無法者で、不法法だ。なぜなら、こちらの予定などお構いなしに、自分の人生の道に土足で踏み込んでくるものなのだから。

始まるのは運命の物語。そのとき彼女は、確実に自身の生き方を変える出会いを果たした。

「こつち、こつち。近道なのよ」

そういつてアリサは二人を少し薄暗い林道を案内する。

「こんな道、どうやって見つけたの？」

すずかはそういいながら木々に囲まれた砂利道を眺めた。

「ジョンの散歩のときに見つけたのよ。ここを通れば、塾まですぐよ」

フンと何故か誇らしげに鼻を鳴らすアリサになのはとすずかは少し苦笑を浮かべた。

まるで、それは秘密の抜け穴を見つけた男の子が浮かべる得意げな表情にとてもよく似ていて、ほほえましいような、女の子としてそれはどうなのかと思ったりと、なにやら複雑な感触だった。

「ジョンって、アリサちゃん家の大きな犬さんだよね？　いつも、散歩でここに来るの？」

アリサの家は資産家らしい豪邸で、その広い庭には大型犬が多く飼われている。その中でもジョンという犬は、とくにアリサが気に入りの穏やかな気性の犬で、なのはも彼女の家に行くといつも遊んでもらっているお得意様でもある。

そんな、彼女の身丈よりも大きな犬の散歩となると、大変だろうとなのはは思うが、その情景を思い浮かべてみると、はたしてどち

らが散歩されているのか分からなくなりそうだった。

「時々ね。いつもだったら、この途中までで引き返すんだけど、この前は少し向こうまでいってみることにしたのよ」

「ジョン君に迷惑かけなかった？　アリサちゃん」

まるで探検談を話すようにきらきらと表情を輝かせるアリサに、すくは若干肩をすくめた。

「なに、それどういう意味！？」

「まあまあ、アリサちゃん。すずかちゃんはそんな意味で言ったんじゃないくて……ええっと………」

少し憤慨して目をつり上げるアリサをなだめようと横を向きに歩こうとしたのは、そのために目の前から俯いて歩いてくる人影に気がつくことが出来なかった。

「きゃっ！」

ドンと何か硬いものが肩に当たる衝撃になのはは思わずよろけ、「なのはちゃん！」と声を上げたすずかに両肩を支えられ、何とか転ばずに済んだ。

「あ、ご、ごめん……」

なのはにぶつかった人物も、俯いて前を見ていなかったのか、とても驚いた様子だったが、すぐに頭を下げて謝った。

「あ、えつと……」

なのはは衝突のショックからなかなか立ち直れずにいたが、目の前の少年が面を上げると同時に息をのんだ。

蜂蜜のような綺麗な髪に、女の子と見間違えるほどの整った顔、そして何よりもまっすぐ目に飛び込んでくる翡翠の宝石のような透き通った瞳になのはは魅入られるように言葉を失ってしまった。

「なのは、なのは……」

アリサに横からつつかれ、なのはははっと意識を戻し、おずおずと頭を下げる。息なりのことでまだドキドキと早鐘を打つ胸の鼓動がとても苦しく、なのはは頭を下ろしながら何度か呼吸を整え、最後に「ふう……」と息を吐いて面を上げた。

「ご、ごめんなさい。ボーツとしてました……」

「う、うん。僕も、前を見てなかったから……ごめん、大丈夫だった？」

「わ、私は大丈夫です！」

何となく焦るなのはは少年は少し小首をかしげながらも微笑み、

「良かった……それじゃあ」

といって三人の横を抜けていく。

「あ　あの！」

なのはそんな少年に慌てて声を変え、引き留めるように彼の腕をつかむ。

「痛っ！」

腕をつかまれ少年は少し顔をしかめる。なのは慌てて手を離し、よく見るとその手のひらには薄く赤い血がついていることに気がついた。

「えっ？ 怪我……してるの？」

「大丈夫、大丈夫だから……放っておいて……」

「だ、ダメだよ！ちゃんと手当しないと……！」

なのは今度は傷に触れないように少年の手を取り、何となく入り込めないアリサとすずかに向き直り、

「絆創膏とか持ってない！？」

「あ、えっと……一応……」

何かと用意の良いすずかはすぐに鞆を開いて、小さくて可愛らしいキャラクターの絵の入った絆創膏を差し出した。

「ありがとう、すずかちゃん……ちょっとじっとしててね」

「あ、えっと……」

少年は声を上げようとするが、なのははそれを無視して、彼の腕の傷に絆創膏を貼り、そして自身の緑色のリボンを外してその傷口に巻き付けた。

どうして、自分はこんな事をしているのだろうかとなのは思った。本来なら少しぶつかっただけで、後はさようならをして終わりだというのに、お気に入りリボンまで使って彼の手当をしてしまっている自分に純粋な驚きを感じていた。

「これで、応急処置にはなると思うけど、後はちゃんと家に帰って消毒とかしてね？」

緑色のリボンを巻き付けた腕をそつと撫でながらなのはは縋るように彼を見つめた。

「あ、う、うん……ありがとう……」

少年は、照れくさそうに頬を紅くし、少し俯いてなのはに礼を述べる。

「どういたしまして、なのかな？ ごめんね、怪我してるのに、さわっちゃって」

「いいんだ。そんなに、深い傷じゃなかったし。ちよつと転んで出来ただけだから」

「そ、そうだね。この辺、砂利道で、歩きにくいもんね」

つらつらと続いていく会話に、なのははなにやら違和感をぬぐうことが出来なかった。どうして、すれ違ふとき、自分は彼の腕を取ってしまったのか。例えばそれが顔見知りの人であっても、普段の彼

女なら、そんな強引な事はしない。しかし、彼の姿をみて、その双眸に覗かれて、気がつけば彼を引き留めてしまっていた。

そして、今もない話題を無理矢理引き出すように、ぎこちない会話を続けようとしている。

自分は、彼との別れを惜しんでいるのだろうか。そんなことを頭の隅で考えながら、ギクシヤクとした会話を続ける。しかし、それは突然襲いかかった強い耳鳴りがその終わりを告げた。

キーンとガラス同士がこすりあわされる甲高い音が耳朵を叩き、なのはは「んっ！」と短く声を上げ、思わず耳を塞いだ。

「いまの……なに？」

ほんの一瞬だけのことににもかかわらず、いつまでも耳の底に残る音になのはは眉をひそめ、突然俯いて苦しそうな表情を浮かべるなのはに親友の二人は慌てて彼女に駆け寄った。

「どうしたの、なのはちゃん」

「なんか、変な音が聞こえて……」

「変な音？ 別に、何も聞こえないけど？」

親友二人は実に落ち着いた様子だった。あれだけ強い音だったというのに、二人は聞こえなかったのかと思うのはだったが、目の前に居る少年が少し驚いたような顔をしていることに気がついた。

「えっと……」

見つめられて恥ずかしいと思いながら、なのははおずおずと話し

かける。

「あ、ごめん。じゃあ、僕は行くから……」

「あ、うん。さっきはごめんね……」

名残惜しさを感じながらも、なのはにはもう彼を引き留めるだけの言葉は遺されておらず、せめてまた会えるかどうか聞くべく口を開こうとした。

「いいよ。じゃあ、……さようなら……」

しかし、それはかなわず、少年は軽く手を掲げ、きびすを返した。

「あつ」

背を向ける少年の姿が、徐々に薄暗くなっていく林道の脇、木々の生い茂る林の中へと姿を消していった。

「なんだか、不思議な人だったね」

なのはに近寄りながらすずかはそつと漏らした。

「そう？ あたしは別に普通の男の子にみえたけど？」

フード付きの上着に膝丈ほどの短いズボンをはいた彼は、確かに髪の色や目の色など、とてもこの国出身者には見えなかったが、アリサにとってはそれほど奇妙には思えなかった。

むしろ、金髪に白い肌を持つ自分と同じような特徴を持つ彼には奇妙な親近感さえわくほどだった。

なのはは少年が消えていった木々の合間を見つめながら「うん……」と小さく頷いた。

「そろそろ行こう？ 塾に送れちゃうよ」

すずかはいつまで経ってもその場を動こうとしないなのはの手をとり、軽くそれを引いた。

まるで、夢を見ていたような感触だった。どうして、自分はこんなにあの少年のことが気になるのかとなのは思う。透き通る翡翠の双眸に心が奪われ、そして目を離すことが出来なくなっていた。特別な出会いだったのかもしれない。それはまるで、これからの人生のすべてが変わってしまうかのように思え、なのはは初夏にもかかわらず林を抜けて海から流れ込む一陣の風に少し肩を震わせた。

なのはは道を行く二人の背中を追いかけながら、ふと背後を振り向いた。

普段は誰も通らない道が向こうまで伸びている。

もう一度思い浮かべる彼の瞳は、綺麗であり悲しみを奥に称えていたように思えた。どうして、彼はそんなに悲しそうな目をしているのか。知りたいと思ってもその答えは暗がりの向こうへと消えてしまい、次に会えるかどうか分からない。

（また、会えればいいな……）

もう一度あえて、それでどうすればいいのか、なのはには分からない。

しかし、なのはにはどうしても彼を放っておけない、放っておいてはいけないと思えた。

黄昏時の空に夜の到来を告げる一番星がただ独り輝いていた。

第二話 Condoling and Mourning

全てが上手くいっていれば、今頃彼は部族に戻って大人達と浴びるように酒を飲んでいただろう。彼は、発掘のつきあいが終われば、いつでもそうしていた。

彼は、スクライアが管理局には内緒で作っているドロクが特にお気に入り、発掘を終えて帰る道中では、今年の出来不出来を同行の大人達とよく話している風景が見られた。

本当に、彼は生きることを楽しんでたとユーノは思える。

『Cool and Pleasureだよ、ユーノ。それさえあれば、大体のことは上手くいくもんだ』

落ち込んだとき、寂しさを感じていたとき、彼はそう言ってカラ笑い、そして、気が晴れるまでただ隣に座っていてくれた。

部族の子供達にいじめられて、家出をするように近くの森に駆け込んだとき、真っ先に見つけてくれたのも彼だった。

『逃げたいと思うんだったらそれでいいさ。捨てたいと思うんだったら捨てればいい。ま、後悔の無いようにな』

帰りたくないとかぐずくユーノを彼はそう言って連れ戻そうともしせず、ただそう言って川で釣りをし、仕掛けを張って獣を捕まえ、木の皮や洗って干した獣の革や蔓でテントを作り、いつまでもそうして側にいてくれた。

スクライアの部族のために学校に通って早く一人前になりたいという願いに真っ先に賛成してくれたのも彼だった。

『俺は、学校なんて通ったことがないからな。土産話の為にもしっかりと遊んでこいよ!』

そう言つて彼は、常に身につけていた宝石、レイジングハートをユーノに渡し、快く送り出してくれたのだ。

《なつかしいことです》

思い出話を呟くユーノに、首から提げられたレイジングハートはチカチカと光を灯しながら、どこかしみじみとした様子で呟いた。

「うん、そうだね、レイジングハート。とても、懐かしいって思うよ……。もう、取り戻せないことなんだ」

《……殺しても死なないと思っていたのですがね……分らないものです》

「うん、ベルディナも、自分でそう言つてた……」

『俺は、死なないようにできてるんだ。どういう訳か、いつもいつも生き残っちまう人間なのさ』

飄々としたように、そして、その瞳の奥底に言いよのない感情を秘め、彼はただ笑っていた。ユーノの記憶に残る彼の表情は笑顔に埋め尽くされている。どうして、そこまで笑っていられるのか。300年間の長い時を誰からも置き去りにして生きていかなければならなかった彼は、どうしてそんなに笑っていられるのか。ユーノは最後の時までそれが分からなかった。

「ねえ、レイジングハート」

《どうしましたか？ マスター・ユーノ》

「ベルディナは……一体何者だったんだろう？ 僕は、ベルディナが本当はどういう人なのか、分からなかったから。レイジングハートなら知ってるよね？」

《さて、私とて、前所有者と共にいたのは僅か40年ほどでしたから。おそらく、知っていることなどあなたと同じ程度でしょう。いけ好かない謎な奴ですよ、彼は》

「そう……」

踏み抜いた細い枯れ枝がパキリと音を立て、静寂の森に甲高い音を鳴り響かせた。

遠くからは鉄道の車輪の音が、断続的な音を立てて流れ込み、頭上には薄ボンヤリとした星空が、深と沈み込むような暗がりの木々の梢は、潮の香りの残る微風によってザワザワとざわめき立てる。

茂みをかき分け、ユーノはようやくそこにたどり着く。

密度の高い木々の中、緑色の天井がぽっかりと開けたダンスホールのような広場。

まるで、夜の妖精達が晩餐会を開くために設けられたと思わせるような広間の中心には、蒼く冷涼な光が満ちる。

「やっぱり、あの事故で封印が解けてたんだ……」

ドクン、ドクンと、まるで心臓の鼓動のように波打つ輝きを放つ

菱形の蒼い宝石にユーノは目を細める。

《しかも、発動臨界にさしかかっているようです》

レイジングハートの言葉に呼応するように、ジュエルシードの光は次第に黒ずんでいき、それらは毛玉のように肥大化し、徐々にその姿を変じていく。

膨張する影のような身体に、血のような真つ赤な双眸が宿り、その身は燃えさかる黒い火炎のような揺らめきを見せながら、それは確かに地面に身をおろした。

何の感情もこもらないように思える紅い双眸がユーノを睨み付ける。表情が全くないそれにもかかわらず、ユーノにはどこかそれは自分を恨んでいるように思えた。

あるいは、眠りから無理矢理さまされたジュエルシードがその原因となった自分にたいして怒り、憎悪を持っているのかもしれない。ユーノは、それを申し訳なく思いながら腕を一闪させ、スクライアの民族衣装を模したバリアジャケットを展開し、レイジングハートを手に握りしめた。

「こうやって、君を戦闘に使うのは、初めてになるのかな？」

《そうでしょうね。いけ好かない前所有者と、あなたの過保護な祖父と兄たちのせいで、私はこれまで私は自分の本懐を果たせたことがありませんでしたから》

「じゃあ、レイジングハートは、こうなって嬉しい？」

《どうでしょう。実際的にはあなたはまだ私を正規起動セッ・アップさせることが出来ませんから。中途半端ではありません》

「ごめん、不甲斐ないマスターで」

《かまいません。人生……私の場合はデバイス生というべきでしょうが……いずれにしてもそれはまだ長い。いずれ、そのような者も現れるでしょう。それよりも私にとって、あなたがこのような戦いの場に追いやられたことに悲しみのようなものを感じています。ベルディナが言っていたように、あなたは戦いには向いていませんから》

「だけど、今はそんなこと言ってられない。力を貸して、レイジングハート」

《あなたが望むのなら、いくらでも。マスター・ユーノ、この小汚いिकासミ野郎に身の程というものを分からせてやりましょう》

跳躍して体当たりをしようとする影の塊に対して、ユーノは腕を掲げ、魔力を展開させ始めた。

第三話 Cross Point

なのはの夢。夢の中で闘う男の子の夢。

それは、夕方に出会った少年と瓜二つで、彼の腕に巻かれた緑色のリボンが、夢に出てきているのは彼なのだと言ったことをなのはに知らせた。

自分の身長の数倍はありそうな影の塊が飛び回り、彼は手に光の盾を生み出しながらも苦しそうな表情で歯を食いしばるばかりだった。

（どうして？）

苦しそうに闘う彼を見て、なのはは夢の中にもかかわらず問いかける。

（どうして、あなたはそんなに苦しそうな？）

衝突を受け止められてもなお、ただひたすらに進撃を止めようとしない影に、まるで火花が飛び散るかのように剥離していく翡翠の光。鈍色に彩られた森の中にその明滅が激しくまき散らされて、それは一種幻想的な風景のようになのはには思えた。

その足下からわき上がる光る鎖が黒い塊を包み込む。

『妙なる響き……光となれ……悪しきものを、封印の輪に』

瞬時にわき上がる翡翠の光に、なのはは夢の中にもかかわらずギョツと目を閉じた。

『ジュエルシード、シリアル21。封印!』

目を閉じたと思ってもそれは消えず、少年が放った光の奔流は影を包み込み、そして吹き飛ばした。

晴れ渡った影の中からは小さな菱形の宝石が浮かび上がる。

綺麗だとなのは思った。そして、彼はその宝石を痛ましい表情で見つめ、胸をつかみ、心臓をかき破ろうとするほどにきつく握りしめた。

《Cool and Pleasureです。マスター・ユーノ》

まるで機械によって合成されたような女性の声が響き、ユーノと呼ばれた少年はゆっくりと腕の力を抜き、そしておろした。

『分かってる……だけど、やっと二つ目か……先は長そうだね……』

ユーノは宝石をつまみ上げ、胸に下げられた紅い宝石にそれを押しつける。それはまるで水面に飲み込まれるように宝石の中に取り込まれ、なのは目は丸くした。

(すごい……まるで、魔法みたい……)

《ジュエルシード格納完了。安全確認……。焦りは禁物です。先は長い。何より、あなたはまだこの世界と魔力が適合していない状態で、リンカーコアの出力も出せて三割といったところでしょう。今日は、休みましょう》

『……………そうだね、分かったよ、レイジングハート……………』

ユーノはそういつて立ち去る。なのははその場にとどまり、動くことが出来ない。

よろよると、けっして浅くない傷からはまた鮮血が流れ落ちていく。

夕方に巻いたばかりの翠のリボンは綺麗なままだったが、いずれあのリボンも血に染まることになるのだろつかともうとなのはは背筋を震わせることしかできなかった。

（何でだろう？）

なのははさび色じみた空を見上げ、ぽつりと呟いた。

（さつき、会ったばかりなのに……）

森の木々がぽっかりと開けた広間の天井にはまるで空白のように空が見える。差し込んでくる光はどれも薄く、鈍色に染まり、時折吹く風に舞い上がる木の葉もまたその光に当てられて鈍く光を身にまとう。

（なんで、あの子の事がこんなに気になるんだろう……）

なのはは彼が去っていった方をただ眺め、そう呟いた。出来ることなら、彼の肩を支えてあげたい。一人で頑張らなくても良いんだよと言ってあげたい。また、リボンで彼の傷を手当てしてあげたい。もっともつと話をしたい。

（何でだろう……）

なのははただそれだけを思い、次第に暗闇に閉ざされていく世界

を眺め、ただそれだけを思い浮かべていた。

目が覚めても夢のことは覚えていた。奇妙な夢だと思った。あまりにも現実味が無く、まるで魔法のような奇跡が繰り返される夢だった。

しかし、その夢の感触が耳の奥、目蓋の裏側にまで焼き付いているように思えて、なのはは初夏にもかかわらず布団から起こした身をブルリと震わせた。

「また、会えるのかな？ 会いたいな」

そうして、なのははベッドから足をおろし、鳥の歌声の鳴り響く朝日に包まれながら、繰り返される日常に身を投じた。

家族と共に朝食を取っているときも、その通学中のバスの中でも、はたまた、朝の教室で珍しく車で登校していたアリサとすずかの二人と他愛もない話をしているときも、教師の声とホワイトボードを叩くペンの音が断続的に教室に響き渡る授業の時も、この日のなのははどこか上の空で、何事にも意識を集中することができなかった。

その頭の中に渦巻くものは、やはり、昨晚見た夢。なんの憂いもなく、ただ日常を享受する自分自身と、悲しみの瞳を浮かべ、胸をきつく握りしめる彼との差を感じてしまえば、果たして自分はここにこうしていて良いのだろうかという疑惑さえ浮かんでくる。

何度か教師から注意をされつつも、彼女の集中力は戻ってこず、結局放課後になるまでただひたすら夢の中の少年、ユーノの事ばかりを考えていた。

「あんた、ほんとに大丈夫でしょうね？」

放課後になり、上流階級らしいレッスンの予定が入っていたアリサとずかをリムジンまで見送ったなのはに、アリサは別れ際にそんなことを訪ねた。

「えっ？ なにが？」

腕を組んで、どこか不審そうな眼差しで見るアリサになのはは少し後ずさりながら、少し曖昧な笑みを浮かべた。

本当にこの友人は隠し事が下手だ。とアリサは組んだ腕をほどいて、ヤレヤレと言わんばかりにため息をつきながら、チラリと同乗者となるずかに横目を向けた。

「なのはちゃん、何か悩みとかあるの？ 今日はずっとぼんやりしてたみたいけど」

「えっと、そんなこと……ないよ？」

「嘘ね。昨日だって寝不足で、今日はボーッとして。それで何もないなんてあるわけないじゃない」

アリサはなのはを指さし、目をきつく切り結んだ。

「分からないんだ……」

「えっと、なにが？」

「それも分からないの……私がどうしたいのかが分からなくて……それで考えても答えが出なくて……」

悩みかと言われて、なのはは答えを出せなかった。何でもない、そのことはなのはの中では真実に違いがなかった。ただ言葉にしてしまえば、つい先日であった男の子のことが忘れられなくて、それを夢に見てしまうほどだと言うこと。

そして、その夢がまるで幻想的で現実とは思えないのに、その彼が今も同じ空の下で苦しんでいるという、全く根拠のない確信だけ。そんなこと、言えるはずもない。下手をすれば、怪訝な顔をされ、医者に診てもらった方が良くとか、草津の湯でも直せない病気だとか言われそうで、なのはどうしてもそれを口に出ることが出来なかった。

何よりも、そんなふうに一人の人間にここまで意識を持って行かれる自分自身が信じられなかった。

「……………そのうち、話してもらっわよ……………」

アリサはそう言い捨てて髪をひらめかせ、待たせていたリムジンに乗り込んだ。

「ごめんね、アリサちゃん、すずかちゃん」

後部席の奥に座り、まるで話を聞きたくないと言わんばかりにそっぽを向くアリサをなのははひたすら申し訳なく思いながら、そつと頭を下げた。

「いいよ、なのはちゃんが話したくなったら話してくれれば。いつまでも待つてるからね」

すずかは少し寂しそうな表情を浮かべ、それでも一生懸笑顔を作りながら車に乗り込んだ。

「では、参ります。お嬢様方」

リムジンのドライバーの声により、車のエンジン音が高鳴り、すずかはまだそっぽを向いたアリサを見続けるなのはに手を振る。

「じゃあ、また明日ね」

「うん、また明日。今日はごめんね……」

二人の短い別れを見届け、リムジンはゆっくりと発進し、徐々に速度を上げて去っていくリムジンなのはは最後まで手を振り見送った。

そして、車が角を曲がり姿を消すと、なのはは軽く息をつき、ふと、空に目を向けた。日が沈むまでまだまだ時間がある。

今日は、おそらく家に帰っても同じように悩み続けるのだろう。そう思うと、家に帰る意欲がなくなってしまう。

「ちょっと、寄り道しようかな……」

誰に伝えることなくなのははそう呟いた。

そして、なのははどこからか空気が鳴動する音を聞いた。

「また、この音だ……」

まるで頭の中をかき回されるような甲高い音なのは耳を押さえ、それが聞こえた方向にある木々の緑に覆われた小高い山を眺めた。

「あの子……いるのかな？」

思えば、昨日、彼と別れる間際にも聞こえた音に思えた。その音に彼はまるでじかれたように去っていき、そして夜に夢に見た。それが何故かすべてつながっているように思え、なのは手のひらを胸の前でギュッと握りしめた。

もしも、夢に見たことが現実起こっていたとすれば、おそらくそこにあるのは、ともすると命の危険さえある状況なのだろう。

引き返すことが出来るのは今だけなのかもしれない。しかし、なのはそれすらも今は考えることなく、かけだした。

二つの道は今ここに交差を迎えた。

第四話 E t r a n g e r

柔らかな木漏れ日の光に照らされて、目を覚ました時、ユーノは身体に走る痛み、歯を食いしばった。

「あゝ、痛いなあ……」

せめて他人事のように、まるで大したことではないように振る舞えばこの痛みも何でもなくなることを期待しながら、ユーノは起きがけの定まらない頭を振りながら、治癒魔法を展開した。

いつそのこと、変身魔法を使って小動物になってしまおうかとも思ったが、この森の中には野生の獣も多い。小動物が木の陰で眠っていると分かれれば、腹を空かせたイタチや狐、野犬などといったものが襲いかかってくるかもしれない。

それに対する労力と、小動物になることで抑えられる体力、魔力の消費を天秤にかけると、どうしても変身魔法に二の足を踏まざるを得なかった。

《怪我の方はいかがでしょうか？ 昨晚は、なかなか手ひどくやられたように思えましたか》

翡翠に輝く魔力光を反射させながら、ユーノの首から提げられたレイジングハートはそう訪ねた。

「まだ、軽傷だよ。傷よりも空腹の方が辛いなあ……」

そういつてユーノは治療魔法を保持しつつ、やたら元気にかなり声を上げる腹に手を置いて、何となく苦笑を浮かべた。

《腹が減ると言うことは、健康な証拠です。何か、食べ物をあさりに行きますか?》

魔法により痛みが徐々に無くなっていくことに安心を覚えながらユーノはレイジングハートの言葉に耳を傾け、これからどうしようかと空を見上げた。

木々が織りなす新緑の天井からは明るい陽光が漏れ降りて、朝の薄霧がその光に形を与えて輝く。まるでそれは森が光のカーテンをまとっているように見え、ユーノはホッとため息をついた。

この世界に漂流して、数日が過ぎた。海もあり、山もあり、文明的な街もある。夜の治安もよく、森もよく整備されて危険は少ない。いい世界だとユーノは思った。しかし、その文明から外れたユーノは様々な意味で過ごしにくくもあった。

治安が良いということは、この国に戸籍を持たない自分にとって逆は自由が阻害され、整備され人の手が入った森から糧を得ることとは意外と難しいのだ。下手に保護されている動植物を捕獲してしまえば、おそらくそれが周辺自治の問題に上げられるだろう。

かといってまるで邦外然とした自分が日中の街を歩いていては人の目について仕方がないだろうとも思う。

《やはり、救援を待った方が宜しいかと思えます》

ユーノはレイジングハートの言葉に、肩をすくめた。普段は皮肉ぶった口調が目立つ彼女だが、その実は身内と思うものに対しては非常に過保護になるのだ。それは、まるでベルディナの分身に思えて、ユーノは少し複雑に思った。

「ねえ、レイジングハート」

おそらく、レイジングハートのいうことは正しい。それはユーノにも深く理解できた。コミュニティの支援を受けられない人間は生きることままならない。それは、どこでも同じで、ユーノ達スクライアは自ら独自のコミュニティをつくることで世界を放浪することが出来る。

その助けも得ることが出来ないのなら、無理に行動せず、いずれ訪れるであろうスクライアから、あるいは時空管理局からの救援を待つことが最善なのだろう。

《YES》

しかし、ユーノはその考えに面を振り、立ち上がった。

「この世界の人は、とても親切だね」

ユーノは、いまだ腕に巻かれた緑色のリボンをさすり、そっと微笑んだ。すでにその傷は癒えているというのに、彼はそのリボンをどうしても外すことができなかった。

お守りのように、自分を護ってくれていると思えるものだった。

《ええ、若干お人好しが多すぎる嫌いもありますが、悪くない世界と考えます》

温かい人だとユーノは思った。初対面のはずで、本当なら会うことも無かったはずの自分に対して、あそこまで一生懸命に手当をしてくれた。

「だったら、一刻も早く、ジュエルシールドみたいな危険なものは回収しなくちゃいけないんだ」

もしも、彼女がジュエルシードによって命の危険にさらされることがあれば、それはユーノにとって最もおそれることだった。ただ臥して待つことなど、出来ない。

《あなたならそういだろうと予想はしていました》

「ごめんね、レイジングハート。だけど、これだけは譲れないんだ」
救援を待つといつても、今の状態ではそれを要請する手段がない。あるいは、この件に気が付いたスクライアが今すでに管理局に通報しており、管理局もただちに重い腰を上げてくれているとしても、管理外世界への渡航のための手続きにより最低でも数週間の時間がかかるはずだ。

その数週間の間、この世界は昨晚相対したジュエルシードの脅威にさらされることとなる。内部に莫大なエネルギーを蓄えた、次元干渉型の爆弾が実に残り19もの数がこの世界、この地域に散逸しているのだ。

この世界には魔法技術が存在しない。故に、この件に今現在対応できるのは自分を置いて他にないのだ。

《マスターであるあなたからそういわれれば、デバイスに過ぎない私には反対することは出来ません。ご自愛を、私からはそれしか言えませんが》

「大丈夫だよ。もしものことがあっても、ベルディナが迎えに来てくれるから。ベルディナの所に行けるんだから、きつと怖くない」

《……………ひとまず、今は食料を何とかしましょう。この数日、ま

ともに食べていませんから》

「そうだね……ひとまず、山菜でも集めようか？」

《動物性タンパク質もお摂りなさい。昨晚、この近くにウサギの通り道がありましたから、簡単な罾を仕掛けてみてはいかがでしょうか？》

「そうだね、竿になりそうな木もあったし、日中はパトロールがてら海にも行ってみようか」

ユーノとレイジングハートはそう粗々と今日の予定を考えながら、背中を預けていた木から身を離し、奥深い木々の間へと向かった。った。

第五話 R a s h

世界が異なっても、変わらないものはたくさんある。日が沈む赤い夕暮れの空に、夕日に照らされて薄紫色にたなびく雲、次第に透き通っていく空気は夜の到来を告げ、ねぐらに戻る鳥たちの群れが空を彩る。それらは、何ら変わることなくどこにでもある光景だった。

改めて考えれば不思議なことだった。文明の発祥も、文化の始まりも、それどころか大地の形成から何から異なる道を歩んでいるはずの世界達が、どうしてその根本を同じにしているのか。

思えば、スクライアが発掘してきた古代の遺跡にも、そういった光景は今と変わらず、ただひたすら繰り返され続けていたものだった。

絶えず繰り返されていく。発祥、興盛、衰退、滅亡。それらがまるで決まり切った戯曲シナリオの如く演じられているように思え、ユーノはやがてこの世界もそのような運命をたどるのかと考えてしまう。

「うまく行かないものだね」

ユーノはため息まじりにそう呟いた。時々刻々と深くなっていく暗闇が、次第に歩く足下を隠していこうとする。サクリ、サクリと鳴る柔らかい地面を踏みつける音が、静かな林道に響き渡っていた。流石にこの時間になってはわざわざ山を登ってこようとするものなど居ない。

街灯も申し訳程度に設置された道は、お世辞にも安全とは言えないが、誰もいない環境というものはユーノにとってむしろありがたい

ものだと思わせる。

昼間に町中を歩いていては、人々から不審な目で見られ、警察からも声をかけられる。そのため、ユーノは、極力人目のない道を選び、平日の昼間であるため人の少ない海に出て竿をおろし、ゆっくりと索敵魔法を広げてジュエルシードを探っていたのだが、まるつきり坊主だった釣果と同じように、発動していないジュエルシードを探り当てることは出来なかった。

《まったく、不自由なものです》

結局、朝に取った山菜以外、まともなものを口にしてないユーノは栄養不足によって足下をふらつかせながらねぐらとしている森へと足を進める。

これから夜になるまで休み、それから朝方まで街を搜索する予定だったのだが、今の状態でそれが出来るかどうかは怪しいところだった。

《せめて、仕掛けておいた罠に何かかかっていると良いのですが》

朝にユーノはウサギの通り道に非常に単純な罠を仕掛けておいたのだが、警戒心の高い野生のウサギはおそらくそんなものに簡単に引つかかってくれないだろうとも予想していた。

更にいえば、海の魚も、地元の釣り人によつてよく鍛えられているようで、ユーノの即席の釣り具相手では戦力にもならなかった様子だ。

「魔法が使えれば、簡単なんだけどね……」

《使えばよろしい。いくら魔力不適合により回復ができないとはいえ、まだそこまで不足しているわけではないでしょう》

輸送船の事故はひどいものだったが、ユーノはベルディナによって守られたおかげもあり、体力、魔力共に割と万全の状態でこの世界に落ちたのだ。これがもしも、スクライアの里から長距離転送を繰り返して訪れていたのであれば、それによって消費した魔力が回復できず、終わりはもっと早く訪れていただろう。不幸中の幸いとも言えるかもしれない。しかし、それがベルディナの命を代償にもたらされたものであると考えれば、とても幸いと言うわけにはいかなかった。

「だけど、今使ったら、ジュエルシールドが探せなくなっちゃうよ。それじゃあ、本末転倒だ」

スクライアの里では一晩眠れば、あらかたの魔力は回復した。しかし、この世界の魔力はユーノのリンカーコアの魔力に適合していない。おそらく後半年から一年ほどこの世界に滞在すれば、徐々に徐々にそれがすりあわされていき、やがてはフルパフォーマンスで魔力を扱えるようになるだろうが、それも今では望めないことだ。

故にユーノは、リンカーコアの出力を意図的に下げることで魔力の浪費を抑えているのだが、そのために昨晩は遺跡の防衛機に比べれば圧倒的に劣る戦力しか持たない暴走体に随分と苦勞する羽目となっていたのだ。

《私があなたをフルサポートできないことが悔やまれますね。全く、こんな時に役に立たずして何のためのデバイスか》

レイジングハートはユーノをマスターと呼んでいるが、実質的にはゲスト登録されているに過ぎない。どうしてレイジングハートがユーノをマスターと呼んでいるかといえば、それは単純な話で、レ

イジングハートがユーノをマスターと呼びたいから呼んでいるだけのことだ。

本来、デバイスとしてはマスターでない魔導師に対してそこまで義理立てする必要など無いのだが、いかんせんレイジングハートの感情回路はそれに憤りという不条理な思考を生み出している。

「ちゃんと助けてもらってるから、心配しないで。今、君が居ないと僕はまともに封印魔法が使えないんだし、ジュエルシードを安全に保管する事だつて出来ないんだから」

不機嫌そうに表面をチカチカと明滅させるレイジングハートの球面をユーノはそつとなでつけた。

《嘘でもそういつていただけるとありがたいと思います、マスター・ユーノ》

表面の明滅が照れくさを現すゆつくりとしたものになり、ユーノはそんなレイジングハートの様子にクスリと笑みを漏らした。

ふと思えば、不安しかわいてこない。果たして、自分はこの世界で生きていけるのだろうか。この世界にまき散らされたと思われるジュエルシードを、果たしてすべて回収することが出来るのだろうか。あるいは、レイジングハートのいうとおり、救助を待った方が良いのか、それとも恥さらしを覚悟の上でこの世界の人たちに助けを求めるべきなのか。

しかし、そんな悩みもまるで姉のように、母のように気を向けてくれるレイジングハートが居れば、何とかなるように思えて不思議だった。

「君が居てくれてよかったよ、レイジングハート」

《それをいうのはまだ早いでしょう。我々が既に手詰まりの状態にあることは事実です。善し悪しはすべてが終わってから述べることであると考えます》

ユーノはまるで照れ隠しのようなその機械然とした口調にクスリと声を漏らし、目の前にそびえる小さな山を仰ぎ見た。

「とりあえず、夜の為に、すこしは身体を休めよう。その後のことは、そのときになったら決めればいい……だね？」

《ベルディナが言いそうな言葉ですね。よろしいと思います。C o o l & a m p ; P l e a s u r e でいきましょう》

ねぐらとして利用している森まであとわずか。ひとまず帰ったらウサギの餌を調べ、色々何とかして夕食を調達して、そして、夜になれば街を調べる。発動していないジュエルシードを探す方法は見当が付かないが、それでも歩き回って、万が一発動してもすぐに対応できるようにしておかなければならない。

ユーノはそんなことを思いながら、徐々に光が去っていく空をふと見上げた。

まるで薄闇の緞帳が徐々に徐々に下がっていくように広がっていく闇に、ユーノは息をついた。思えば、彼もまたことあるごとにこうして空を見上げていた。明るい空に暗い空、光の満ちた空に、今のよう世界が闇に沈もうとしている空を、彼はいつも見上げていたように思える。

どうして、彼はそんなに空を見上げるのかと思ったこともある。しかし、そのときの彼の横顔を見てしまえば、それを質問することとはばかれた。彼と長年を共にしているレイジングハートも、彼が空を見上げる理由を詳しくは知らない。

しかし、ユーノは思った。ベルディナは、今の自分と同じような感情を持って空を見上げていたのではないか。過去に彼は今の自分のような別れを経験してきているのではないかと。それは、当たり前だとも思えた。なにせ、彼は300年の時を生きた魔術師なのだ。生きている人間はことごとく自分を置いて去っていく。どれほどの命を背負って彼が生きてきていたのか、見当も付かない。

森が見えてきた。手入れの行き届いた並木は深^シと静まり、海からの風に木立はかき鳴らされ、サラサラとした微妙の樂をかき鳴らす。厳しい自然がつかの間に見せる美しい音にユーノは一瞬心を奪われ、安らぎが胸に生まれそうになっていた。

そして、ユーノは耳を塞いだ。

「今のは！」

低い耳鳴りのようなものが頭の奥深くに響き渡った。

《魔力振動観測。解析開始……………該当あり、ジュエルシード発動時の固有魔力振動数と九割方一致》

随分強い振動が観測されたとレイジングハートは答えを返した。つまり、それだけ距離が近いと言うことをユーノはすぐさま判断する。

「行こう。方向と距離は？」

《右上方、およそ500m。おそらく、目の前の山の中腹あたりかと》
空を眺める時間は終わった。

ユーノは無言でかけだし、疲労と恐怖に震える足に鞭を打ち、ただひたすらに前に向かって足を踏み出した。

舗装されていない、小石がまかれた道はひどく歩きにくく、安定しない足場は踏みつける足に少なくない負担を強いる。時折滑る後ろ足にユーノはもどかしさを感じながら、目の前の山を睨め付けた。山の中腹で発生したと思われる不気味な魔力波動は徐々に徐々にその強度を高め、今にもそれが圧力となって身体を押さえつけていくように思えた。

しかし、それはあり得ないことだとユーノは同時に思う。魔法的なプログラムによって制御されない魔力など、光波とほとんど同等であり、それは現実的に感じられる力を生み出すはずはない。

怖いと思った。孤立無援で戦った昨晚の事が思い出される。今の自分は、まともに魔力を扱うことが出来ない。そして、今の自分は誰からの援護も受けることが出来ない。そのためにあの程度の相手にも後れを取ることになった。しかし、それは後付の理由に過ぎないと言うこともユーノは理解していた。

（怖かった……僕は、戦うことが怖かったんだ……）

遺跡を調査すれば、どうしてもそういった相手との戦闘はある。しかし、そこには常に仲間がいた。この世に後れを取るものなど存在しないと胸を張る彼がいた。

それが居ないと言うことはどれほど心細いことなのか。

ユーノは山へと続く石段を見つけ、躊躇することなくそれに足を

かけた。

上を見上げれば、遙か上方に赤い二本の柱が見える。その二本の柱にはそれらをつなげる梁が渡されており、それはどこか異世界へとつながる門のようにも見えた。

おそらくそれはこの世界固有の宗教的な構造物なのだろうとユーノは想像しながら、その先にことさら強く感じられる魔力を肌を感じ、おそらくそこにあるとユーノは想像した。

まるで皮肉なことだとユーノは思った。この門を通ればそこには異世界が広がっている。神と出会うため、俗世間と隔離された門としてそびえ立つ門の向こうにそれがあるのだ。まるでそれは、今ある自分の迷いや恐れを一切捨てよ、そしてここまではい上がってこいと言っているようで、ユーノは心臓がゾクリとうずく感觸を味わった。

踏みしめる硬い石段が氷点下の冷気を持っているように思えた。

この先にあるのは生か死か。ともすれば、あれは自分とベルディナをつなげる門であると思い、ユーノはホッと息をついた。

生と死の境に自分はいる、とユーノは感じながら、門をくぐった。

「これは……」

そして、目の前に広がっている光景にユーノは息をのんだ。不気味な魔力波動は未だ続いている。そこにはジュエルシードの暴走体がたたずんでいるはずだった。それは、まるで闇の毛皮を幾重にも着込んだ影の塊だったはずだった。

しかし、目の前にたたずむのは全身を鋼鉄のような革で包み、薄く切り詰められた二対の瞳を持ち、四肢を地について、まるで生き血を求めて夜をさまようヘルハウンドの様相さえ見せる存在だった。

《原生生物と融合しているのですか……やっかいですね。まさか、ジュエルシードにこのような機能があつたとは……》

貪欲に獲物を求めるように開かれた大きな口からは、磨き上げられた刃物のような牙が並び、地に付けられた足に伸びる硬質な爪は、組み伏せた生き物を容易に切り裂くほどに研ぎ澄まされている。そこから感じられるのは憎しみの心。

あるいはジュエルシードも不躰に眠りから起こされたことに対して怒りを感じているのかもしれない。そして、その怒りはここにいる唯一の生き物、つまり、自分へと向けられているに違いなかった。

（そうだよ、君たちの眠りを覚ましたのは、僕なんだから……）

勝手に目を覚まさせておきながら、自分たちの都合で危険と見なし、今は封印しようとしている。ジュエルシードに仮にレイジングハートのような人格が宿っているとすれば、おそらく今の彼らはカンカンになって怒っているのだろう。

《来ます、構えてください》

レイジングハートの短い警告に、すこしだけ集中力を欠かしていたユーノは素早く反応し、こちらに襲いかからんと跳躍を開始した暴走犬に対して腕を掲げた。

「ラウンド・シールド」

《Round Shield》

発生した翡翠の盾。そして、火花のように舞い散る魔力により徐

々に徐々にシールドの表面が削られていく。

無謀な戦いであることは100も承知だ。フルパフォーマンス状態に比べれば、その構成は実に甘く、発動にも時間がかかりすぎている。

ユーノはギリツと歯を食いしばりながらも、こちらを睨み付ける二対の瞳から目を外さず、前に向かって地面を蹴り、その勢いで大きく後ろに下がった。

にわかに関く距離は、およそ数メートル。障壁を打ち破りようやく獲物に牙を届かせたと思いながらも、そこには求めるものが居なかったことに獣は気がつき、どこへ行つたと首を左右に振る。

原生生物を取り込んでいながらも、それほど知的には発達していない様子にユーノは僅かな勝機を見た。

ユーノは胸のレイジングハートを掴み取り、手のひら握りしめ、そして祈りを捧げるように印を刻んだ。万物の完成を示す円環^{サークル}。全ての安定を求める三角^{トライアングル}。それらを聖印として導き出すこの世の奇跡。それらが立てられた指の一つに集まりそして光を奏でる。

「妙なる響き……光となれ……」

はじけ飛んだ魔法防壁^{マウンド・シールド}の光の残滓に視界を奪われた獣も、目前で発せられる光に気が付き、そして、それが自分自身の存在を危うくするものであると本能的に理解し、そしてそれを阻止すべく再び跳躍を試みた。

「……悪しきものを、封印の輪に！」

言葉によって導かれた力は足もとに光の円環を描き出し、そして、

差し出された腕の先に一際輝く翡翠の魔法円がその姿を現した。

そして、その光の方陣円越しに見える、弾丸の如く襲い来る黒い獣の姿がユーノの瞳にはつきりと映し出された。

（間に合え！）

封印魔法は彼の使用する魔法の中でも特に大きな魔力を消費するものだ。本来なら、これは相手がある程度弱り、行動を停止した所で浴びせるはずのものであるが、今のユーノには無駄にできる魔力はひとかけらとしても存在しない。

ユーノの願いに呼応するように一際輝くレイジングハートの赤い光が、視界を覆い尽くす閃光となってあたりを明るく照らし出し、全てを奮い立たせて襲いかかる黒い獣の凶刃が、翡翠と紅の光に到達した。

「ジュエルシード、封印！」

衝突する黒と紅と翡翠。光が爆ぜて火花のようにその残滓をまき散らせる。その中心に立つユーノは歯を食いしばり、腕に襲いかかる重い圧力に耐え続けた。手応えはある。暴走体は封印魔法を受けて、もがき苦しみ、何とかそれより解放されようと暴れ狂っている様子が、荒れ狂う魔力の波動となって感じられる。

（負けない……僕は……負けられないんだ！）

《警告！ 封印魔法安定持続限界を突破、シーケンス解除。自動防衛システム、スタンバイ》

しかし、ユーノの願いは手に持つレイジングハートの短い言葉に

よって終局を迎えた。一瞬に消え去る翡翠と紅の光。そして、薄霧のようにまき散らされた魔力の残光の向こうで息を潜める黒い塊。

（そんな……）

腕を突き出したまま呆然とするユーノに、レイジングハートはすぐさま緊急防御システムを開放しようとするが、それよりもはやくジューエルシールドがとりついた獣は地面を蹴り、その巨大な口腔を大きく開けて飛びかかった。

《Protection》

思考を停止したユーノの命令を待たず、レイジングハートは何か彼のリンカーコアから自然に発せられる魔力を短時間にかき集め、その眼前に薄膜の障壁を生み出した。

しかし、その障壁は先ほどユーノが生み出したラウンド・シールドに比べれば明らかに脆く、飛びかかる獣を気休め程度の足止めしかできず脆く砕け去ってしまった。

「ぐっ！……！」

身体に襲いかかる強い衝撃に、ユーノは息を漏らし、急激に反転する視界に目を回した。

グルグルと安定しない視界の端には先ほどまで手に握りしめていた赤い宝石がアーチを描き飛んでいく光景が映り、そして次の瞬間背中に襲いかかった衝撃と地面に擦りつけられる熱に意識を持って行かれそうになった。

「つう……」

しかし、じわじわと昇ってくる不快感によってユーノは帰って意識をはっきりと保たれ、脳内に分泌されたアドレナリンによって痛みはほとんど感じずにいられた。

骨が何本が折れているかもしれない。

何となく自由に動かない身体の節々を引きずりながら、ユーノはそれでも懸命に手をのばし、足を踏みならして様子をうかがう獣を睨み付けた。

「チエーン……バインド……」

弱々しい声に応じて、ユーノの足下に小さな魔法陣が出現し、その円環の外周に三本の翡翠の光によって構成された鎖が生み出された。

主に相手を拘束し、その行動を止めるための魔法。ユーノが最も得意としている魔法の一つではあるが、満身創痍の今となってはその強度も持続時間もすべてが不足していることが目に見えていた。

光の鎖はユーノの意志に忠実に従い、素早い動きで獣むかつて飛来し、その身体を地面に縛り付けた。

獣は自身を押さえつける鎖に牙をむき、何とか食いちぎろうとするが、本来魔力によって織り込まれた鎖がそのような物理的な力によって何とかなるものではない。本来ならどうにもならないはずだった。

しかし、あまりにも緩い構成によって紡がれたそれは、牙の一噛み、爪の一撫でで構成が剥がされていき、それが再び自由を取り戻すのも時間の問題と思えた。

「やっぱり、ダメか……」

手元には何も残されていない。リンカーコアに蓄えられている最後の魔力ではもう一度だけ封印魔法を発動できるかできないか程度しかない。しかもそれは、レイジングハートの補助を前提とした見積もりであるため、今の彼では何もかもが不足している。

あるいは、このまま逃げ出し、再度体勢を整えて出直すという選択肢も頭をよぎるが、ユーノはそれを打ち消すように面を振った。

これほどまでに獰猛になった暴走体が世に放たれてはいけな。今これが街に出てしまえば、おそらくそれによって命を奪われる人も少なくはないだろう。

「こんなに早く、ベルディナに会いに行けるなんて……運が良いのかな？」

命を賭すべきだとユーノは瞳を閉じ、地に着いていた膝を何とか持ち上げ、ふらつく足にむち打って何とか立ち上がった。

「……後は頼んだよ、レイジングハート。どうか、僕の代わりに誰かを見つけて、この暴走を食い止めて。もう二度と、僕やベルディナみたいな人を生み出さないように……」

心が透き通っていく感触をユーノは味わった。そして、目の前には拘束を食いちぎり、さらなる憎悪を自身へと向ける獣の眼差しがあり、その背後には光に満ちた世界が陽炎のように立ち上り広がっ

ていくように思えた。

大地を踏みしめる力強い音が響く。襲いかかってくるのはおそらくは自分自身の死であるとユーノは実感した。

もう、魔力障壁ラウンド・シールドを生み出し、この身を守る必要を感じなかった。

最後の一撃は封印に。そのための防壁となるのは自身のこの肉体一つで十分だった。

（結局、僕は何も出来なかった……）

ユーノは目を閉じ、腹に力を入れ、最後の魔法を紡ぎ出す。リンカーコアが想定外の魔力出力にきしみを上げ、まるで皮膚が徐々に削られるような感触が胸の中からわき上がってくる。

暴走寸前の魔力のオーバーロード。魔法を扱うものにとってこれほど不快を感じさせるものはない。死を覚悟したにもかかわらず、生きたいという本能が足を震えさせる。カタカタと嫌な音を立てる奥歯をかみしめ、不安定に揺れ動く二の腕を、封印魔法を発動させない方の腕で握りしめ、ユーノはひたすらそのときを待った。

重いものが何かにぶつかる音が耳朶に触れた。最後の時を思い、襲いかかるであろう衝撃に四肢を固めるユーノだが、いつまで経ってもそれは訪れない。あるいは、それが一瞬に過ぎ去り、今の自分は既に命を終えてしまっているのだからかとも思った。

《この世に最後の別れを言うにはまだ早いようですよ。マスター・ユーノ》
ルーヴィス

しかし、その声にユーノは現実を取り戻した。ユーノは目を見開いた。眼前に自身に襲いかかろうとする黒い獣の巨軀。そして、自身を優しく包み込む桃色の光にユーノは一瞬にして心を奪われた。

第六話 Absurd Passion

焦る気持ちばかりが前に出ていて、地面を叩く足音は少しも速く
なつてくれない。荒く吐かれる息と早鐘になる鼓動は、まるで自分
に「いそげ、いそげ」とせかす警鐘を響かせているようだった。

なぜ焦るのか。なぜ急がなくてはならないのか。そんな疑問が浮
かんでは消えて、ついにはそれも浮かび上がらなくなっていく。

初めてあの鳴動、大気が震わされ甲高く鳴り響く音を聞いたとき、
側には彼が居て、彼はその音に向かつていくように去っていった。

そして、夢の中で一方的に再会した彼はその不思議な力で襲いか
かる影と立ち会っていた。なぜ、彼が夢の中に出てきたのか。それ
は分からず、あれが現実にあつたことだとはとうてい思えない。

しかし、偶然にも出会った彼の瞳は、その夢の中においても同じ
だった。まるで、助けを求めようにも求められない。救いなんて無
くて、差しのばされる手を望むことも出来ない。

孤独ということ。ただ一人ということ。助けを求められないとい
うこと。側に誰もいないということ。少し前の自分も、あるいは彼
のような瞳を携えていたのかもしれないということ。

(すごく、悲しそうな目だった)

助けてあげたいと、なのはは唯それだけを思い、今にも咽び込み
そうになる吐息を、肺にめいっばいたため込んだ空気で押し込み、そ
して面を高く上げた。

緑の覆つ、どこか神聖な雰囲気さえ持つ小高い山。そして、遙か

頂上から降りてくる長い石段の彼方。霞んで見えなくなるほど頭上にある朱い鳥居を覆い尽くすような違和感。

時折耳を突くように広がる何らかの波動は、まるで、夢に出た彼が放っていた翠の光のようにも思えた。

「あの子なのかな……」

この先で何が繰り広げられているのか。それを想像することはたやすかった。夢の中の彼が戦っていた相手は、まるで表情の読めない無機質な存在のようにも思えたが、あれはただ一つ、明確な感情を持ち合わせていたようになのはは思う。

まるで深海を思わせるような、深く静かな憎しみ。

間違いなく、あれは人を恨んでいた。彼を憎んでいた。もしも、それが自分に向けられていたらと思うと、なのはは足がすくんだ。夕暮れ時の紅い陽光は、今にも沈みそうになっていて、あたりには薄煙のような暗がりがまとい始めている。

なのはは震える足を両の手で強く叩き、眼をはつきりと開いて石段の初めに足を乗せた。

「待っててね、すぐ、行くから」

助けを求められたわけではない。救いを請われたわけでもない。なのはははつきりと明確な意志で一步を踏み出した。

初めはゆつくりと。まるで、踏み固められた足場を確かめるように、しっかりと一段ずつ足はすすみ。

そして、それは次第に歩調を強めていき、気がつけば軽快な足音が静かな木々の間を抜けていく。

ここに来るまで必死になって走っていたために疲労困憊していたはずの身体はそれでもなのはの願いに忠実であり、空気が足りないとなり声を上げる心肺もいつしか気にならなくなる。頭を駆け上ってくるのは快感とも言える熱であり、それは次第に使命感という感情をなのはに提供し始めた。

しっかりと上げられた双眸が見つめるのは、ただその先にある鳥居の向こう側であり、その更に先には次第に色彩を鈍色に移り変わる空。

それはまるで、天に続く階段のようで、そこから落ちてくる一粒の紅い宝石が、差し伸べられた道標のようだとしたのは感じた。

「えっ
」

それはただの幻覚に過ぎないとなのはは思っていた。にわかにかき上がる強い感情がもたらす酩酊感がそのようなありもしないものを見せているだけだとなのは感じていた。

しかし、その宝石はあまりにも鮮明に空から舞い降りて来ているようだった。

「わっ！！　つとつと……」

思わず前に差し向けた手のひらにぶつかり跳ね返ろうとする宝石を、なのははつんのめりそうになりながら何とか手で包み込みホッと一息ついた。

「これって……」

飾り気の何もない、真つ赤で透き通っているように思えながらも、その表面は驚きに目を丸くする自分の表情を映し込んでいた。まるで、宝石の中から覗き込まれるような感触がなのはを襲う。

そして、これはなのはには見覚えがあった。夢の中の彼が手に握りしめていたもの。夕暮れの林道で予期せず出会ってしまった彼が首にかけていたものだった。

夢の中の彼はこれに、まるで兄弟に語りかけるような風に声をかけていた。これが一体何なのか、なのはには予想することもできない。ただ一つ分かることは、これは彼にとって掛け替えのないものであることだけ。

悲しみの光をたたえる彼の瞳が、これに語りかけるときだけ優しい光となっていた。

これがここにあるということ。その理由を思い浮かべようとなのはは面を振った。

当たって欲しくない予想ばかりが当たるものだ。

「急ごう……」

なのはは決意を固めるように手のひらにのせられた宝石を握りしめ、

《申し訳ありませんが、お嬢さん。この先は危険につき立ち入り禁止となっております。すぐに引き返すことをおすすめます》

「うひゃあ！！！」

どこからともなく発せられた声に思わず悲鳴を上げてしまった。

驚きのあまりたたたらを踏んでしまうのはだが、こんなところで転んでしまえばただではすまないと気が付き、なのはは賢明に足を踏んばった。

しかし、その反動か、おざなりになってしまった手のひらから先ほど握りしめた赤い宝石がこぼれ落ち、石段の上にコツンと落ちる。

《……………まあ、予想はしていましたが、想像通りになりすぎるというのもおもしろみのないことです》

硬い石段に落とされ、与えられた振動に少し不機嫌そうな声を出しながら赤い石　レイジングハートは不満を呈するように表面をチカチカと光らせた。

「えっと、あなたが喋ってるの？」

今にもころころと石段を転げ落ちそうになっていたレイジングハートを慌てて拾い上げながら、なのはは恐る恐るそれに声をかけた。周囲に誰もいないことが今では幸いとも思える。本来的にはものを言うはずのない無機物に対して語りかける自分は、遠目に見る第三者からは酷く滑稽に見えるだろう。

《それ以外になにがありますか？　そう見えなければ、よっぽどあなたの耳が悪いが、それとも問題は頭か。ともあれ、一度医者に掛かることをおすすめします》

しかし、改めて拾い上げた赤い石ころは、あまりのことに驚くを

通り越し、かえって冷静になってしまったのはにも容赦なく罵倒とも思えるような苦言を呈した。

「……石が喋ったって言うよりはまともだと思うの……」

流石にこんなことを言われれば、普段は穏便なのはであっても、眉間に井桁を作ってしまうようになったが、それでも最後の理性を動員して何とか冷静を保つことができた様子だ。

《なるほど、確かにこの世界ではそれが道理でしょう。失礼しました。銅やら私も慌てていたようだ。謝罪しますお嬢さん》

「あ、いえ、こちらこそ、落としちゃってごめんなさいでした」

いきなり殊勝になったレイジングハートに、なのはは思わず頭を下げた。思い当たれば最初に失礼なことをしたのは自分だったと気づけるあたり、なのはという少女はかなり礼節に対する教育が行き渡っている様子で、レイジングハートもこの少女なら信用できるかもしれないと判断することができた。

《なるほど、良くできたお嬢さんだ。いえ、今更でしょうか。あなたはマスター・ユーノを助けてくださった。この場を借りて礼を言います》

「やっぱり、あの子だったんだ。ユーノ君っていうんだね」

今まで夢や予感でしかなかった繋がりがここに来てようやくはっきりとした。夕日の差し込む林道で出会った彼が、夢の中で一方的に再会した彼が確かにこの上にいるとなのはは確信することができた。

先ほどよりも強い眼差しで石段の頂上を見上げるなのは表情を影像で捉え、レイジングハートもまたユーノのいるそこへとモニターを向けた。

星の光の届かない暗い夜の森の中で蹲るように眠るユーノの姿。

この世界に來た当初はその身は震え、目蓋からは薄い涙が流れていた。おそらく彼は自覚していないだろうが、ベルディナが消滅したという事実は彼の中で大きな傷となっている。しかし、彼が今自身を持ち上げる少女に出会い、暖かな手当を受けてからはその様子は変わったように思えた。震えていた身体は落ちつき、涙を浮かべていた表情には安らぎが僅かに戻った。

眠りながらその手は、その腕に巻き付けられた緑のリボンを抱きしめるように回されていた。

間違いなく今のユーノの心の支えは、傷が癒えたにもかかわらず、未だ外そうとしない腕のリボンにあるのだろう。

レイジングハートはそれに少しだけ嫉妬のような感情を浮かべながらも、今にも駆け出しそうにしているのはをモニタリングをし、覚悟を決めた。

《念のために聞いておきますが、あなたは、なんのためにここへ來たのですか？》

「それは……あの子を、ユーノ君を助けるため、だよ」

《それは、無謀というものです。あなたがこちらの事情をどの程度知っているのかは分かりませんが、少なくとも私たちはあなたでは想像の付かない困難と危険の中にあります》

「うん、何となくだけど、分かる……」

《残念ながら命の保証は一切できません。もともと、それはこの世界の住民全員に言えることですが。それでも、あなたは私のマスターに手を貸そうと言うのですか?》

命の保証はできない。そんな言葉はどれほど聞いたことがあるだろうか。小説や映画の中でそんな台詞は言い尽くされている。平和で危険の少ないこの国に住むものにとっては、その言葉はあまりにも現実味のない言葉に過ぎなかった。

「うん……放っておけないから……どうしてか分からないけど、あの子の為になりたいんだ」

そのことを自分はどれほど現実的に捉えられているだろうか。なのは全く判断が付かなかった。こみ上げる使命感や正義感がもたらすある一種の陶酔感に感覚が鈍っている覚えはある。それゆえ、なのはは迷うことがなかった。

迷うことができなかった。

《あなたの決意は分かりました。では、私はマスター・ユーノの身の安全を確保するため、あなたを利用しましょう》

レイジングハートは一際輝き、その光は帯となったのはの身体に巻き付くように駆けめぐり、そして消えた。

「な、なにをしたの?」

なんの予告もなく張り付いて消えた光になのは身体を眺め回した。特にどこかに異常ができたわけでもなさそうだったが、それで

もなにやら奇妙な感覚が、主に胸の奥から湧き上がってくるようだ。なにやら細い針のようなものが突き入れられ、そしてそこから糸のようなものが伸びているような違和感があるように思えた。

《非常に不躰で申し訳ありません。しかし、今は緊急事態ですので私の独断により緊急処置をさせていただきました。そのため、今は詳しく説明している暇はありません。どうか、今は私の指示に従ってください、お嬢さん》

状況は刻一刻変化している。時間が経てば経つほどユーノの身は危険へとシフトしていく。なのはは矢継ぎ早に告げられたレイジングハートの言葉にしずかに肯いた。

「分かった。それで、私は何をすればいいの？」

《その説明は移動しながらでお願いします》

「うん。じゃあ、行こう」

天に伸びる階段はまだ先は長い。夕日を背負って赤く輝いていた山肌は徐々に赤の色彩を薄くしていき、街から戻ってきた鳥達の群れも、その多くはねぐらに着き、あたりは薄ボンヤリとした静寂が漂おうとしていた。

再びかけだしたのはの足音は、頂上より吹き下ろす、春にしては随分冷涼な風にながされていく。吹き付ける乾いた空気の流れになのはは少しだけ眼を細め、風の流れにうるさく靡き、足にまとわりつこうとする制服のスカートの裾を片手で押さえながら、少しだけ安定してきた息をとのながら軽やかにその足を持ち上げ続けた。

先ほどまで見えない波動が漂ってきていた山頂も、今となっては

随分静かになってしまっている。

まだ、彼は見えない。

彼はいったい何をしているのか分からない。あるいはあの夜の夢のように、何かと闘っているのだろつかとなのはは思い、少しだけふるえが込み上がる思いがした。

寒さでも疲れでもない震え。それが手のひらに集められ、レイジングハートはそれを励ますように光を明滅させ、制御回路を僅かに活性化させる。何の意味も無い円周率の計算を高度にマルチ化された制御システムに流し込み、一瞬にして何億桁もの数字の羅列が膨大な領域を持つ記憶素子に流れ込み、

そしてそれは熱となつてなのは手のひらに伝えられた。

それは、数字によって作られた味気のない温度に違いはなかったが、なのはにはまるでふるえる自分をレイジングハートが励ましてるように思え、その唇をほころばせた。

（思えば、幼いユーノもこの熱で泣きやんだことがありましたね。あるいは、人にとって直接伝えられる熱というものが重要な役割を果たすのでしょうか）

自身の知能の一角を支配する一見すれば法則性がないと思われる数字の流れを眺めながら、レイジングハートは呟くように思い浮かべた。

《あなたには強い力、魔力と呼ばれるものがあります》

「魔力？」

《はい、詳しい説明は省きますが、魔法の媒体となるエネルギーです。先ほど、あなたのリンカーコア　魔力の動力源と呼ばれる器官にラインを繋ぎました》

「あの変な感じのこと？」

《おそらくはそうでしょう。それにより、私は一時的にあなたから魔力の供給を受けることができるようになりました》

「そうなんだ。それで、その魔法はどうつかえばいいの？」

《残念ですが、今のあなたではまともな魔法を使うことができません。緊急処置ですので、私ができることはあなたの力を用いて、私の中で私独自の判断で自動展開される　例えば自動防御魔法のような単純な魔法しか扱えません》

「じゃあ、私は……」

彼を助けることができないのか。そう言う思いが一瞬なのは胸をよぎった。

《ですので、あなたは気をしっかりと持ち、マスター・ユーノを助けたい、守りたいという意志を持ち続けてください。魔法の力は意志の力と呼ばれております。あなたの意志が小さければ、それよりもたらされる力も小さく、大きければその分大きくなる。後は、私を信用していただければ、必ず上手くやって見せましょう》

レイジングハートの言葉は冷静なものだった。感情的な揺らぎも

なく、その合成音声もあまりに機械的で人間味が感じられない。しかし、なのははその無機質な感覚の奥に確かに人間らしい意志の力を感じられた。

それは機械であるが故に、人間の側が間違いを犯さなければ必ず期待に応えてくれることを彼女は知っているのだろうか。

「……………分かった、信じるよ」

なのはの手のひらがきつく握りしめられ、その圧力がセンサーをとおしてレイジングハートに伝えられる。

表面には握りしめられた汗が浮かび、血流の振動は彼女の心音が緊張状態にあることを知らせる。

上手くいく可能性は低い。

レイジングハートの回路はその答えを出し続けるが、レイジングハートの人格回路はそれでも何とかなるだろうという判断を下した。全く理にかなっていない。まともなデバイス回路であれば、それはエラーとなる程のことだろうが、レイジングハートは自身の不合理さをむしろ受け入れていた。

《Cool & Pleasureです》

手のひらの中で呟いたレイジングハートの声になのはは目を落とした。

「ん？ 何か言った？」

《独り言です。お気になさらないように。それより、そろそろです。お覚悟を》

見上げれば鳥居はすでに目の前にあった。空は相変わらずだったが、大気は熱を失い、それは夜の到来を物語る。

覚悟ができているのかとなのはは自問するが、その答えは出なかった。

そして、なのははその世界へと一つ足を踏み入れた。

第七話 Beat

いつまでも続くかと思われた石段の頂上。異世界の門とも思えるような赤い鳥居をくぐった先に繰り広げられていたのは、清浄な神前には似つかわしくない、泥水にまみれたような闘争だった。

まるでこの世界の生き物に見えない、いくつもの眼を持つ巨大な狂犬が牙を光らせて唸り声を上げ、そしてその前に跪く少年はまるで戦地を廻る巡礼者のように、そこで費やされた命に祈りを捧げているように思われた。

その彼が捧げる祈りは誰の命なのか。それは考えるまでもないことだった。

確実に言えることは彼はまだここにいて、そして彼の命を奪い取るであろうそれもまた健在であることだけだった。

なのはに迷いはなかった。自分はただ守りたい、助けたいと強く思えばいい。そうすれば、彼は救われるだろうと手に握りしめる宝石は約束した。後は、自分がそれを信じられるかどうか。

何がどうなっているのか。あの犬は何で、どうして手に持つ紅石は人の言葉を使うことができるのか。何も分からない。しかし、なのはは信じようと心に決めた。

「お願い、宝石さん！」

大地を蹴り、襲いかかる巨大な獣がその凶刃を振りかぶり、そして眼前に佇む彼に襲いかかるうとする。

もしも、どうにもならなければ次の瞬間、地に屍を臥しているの

は彼だけではなく、おそらく自分もそこに加わることだろう。

それを思えば奥歯がガタガタと震えそうになる。しかし、なのは、宝石を強く握りしめ、閉ざしたくなる目を何とか見開いて、力強くそれを眼前へと降り出した。

良い霸気だとレイジンググハートは判断した。それがコネクトするなのはのリンカーコアは一切揺らぐことなく、その奥に秘めた莫大な魔力が強く鳴動し、その魔力は洪水のような荒々しさでレイジンググハートの変換器に提供された。

《Protection》

ついに自分はこの言葉を発することができた。レイジンググハートはそのことにマシンでありながら感無量と思えるようだった。

（マスター・ユーノが命の危機にあるときに、私はこうして喜びの感情を示している。思えば、皮肉なものです）

なのはからもたらされ、レイジンググハートが発した魔力は桃色の光を放った。とても優しい、萌え立つ春を思わせる色彩は彼女の心の色をあらわす光。

草木が萌える春の色彩。それは確かに、若草の翠を象徴するユーノを助けるには理想的なものであるかもしれないとレイジンググハートは思い浮かべた。あるいはその故にこの二人は引かれあったのか。なのはの髪とユーノの腕に巻かれている緑色のリボンさえもその象徴と思えるほど、この空間はまさに二人のために用意された舞台に他ならなかった。

強い願いは強い力となり、その力は輝ける魔力光を放ちながら、それは一抱えの盾を生み出し周囲を包み込み、そしてそれは同時に眼前に蹲るユーノをも守りの領域へと導いた。

ルーヴィス
《この世に最後の別れを言うにはまだ早いようですよ。マスター・ユーノ》

その言葉により、失われる命に祈りを捧げるように、きつく眼を閉じていたユーノの瞳が驚愕に開かれた。

満身創痍に目を閉じていたユーノはレイジングハートのその言葉によってようやく目を開けた。

彼の眼前に広がる桃色の壁が彼の死を拒む。既にリンカーコアも限界まで消耗していた彼はうつろな眼を持ち上げ振り向き、そこに立つ少女の姿と、その小さな手のひらの中で、誇り高い輝きを示す相棒の姿をはつきりと網膜に焼き付けた。

「君は……、あの時の……。それに、レイジングハート？ どうして
」

どうして彼女がここにいるのか。なぜ、彼女がレイジングハートを握りしめ、そして魔法を扱っているのか。一体何がどうなっているのかユーノには全く把握できなかった。

《話は後です、目標の足止めを行います。マスター・ユーノはその隙に封印処理を》

しかし、ユーノの問いはレイジングハートの冷静な言葉に阻まれ、そして彼もまた優先すべきことを見失いはしなかった。

「……分かったよ、レイジングハート」

聞きたいことは数多くあった。しかし、ユーノはその追求を胸の中にしまい込み、苦しそうに魔法を行使するなのは目を向けた。

今は命があることをよしとしよう。彼は、恐れ、戸惑い、混乱の瞳を浮かべる彼女を真正面から見つめ、そして、そのまなこの奥には強い意志の力が宿っていることを知った。太陽のように眩しく、月のように優しく、星のように輝かしい光。

まるで吸い込まれるようだと言ノは思った。

《ああ、ちなみに円周率はおおよそ3でした》

なのはの目を見つめるようになっていたユーノはレイジングハートの訳の分からない言葉に気を戻された。

「……………それで？」

横やりを入れられた不満と、女の子の目を見つめていたことの照れくさをこまかすようにユーノはことさら胡乱げ声を漏らした。

《熱くもなく冷たくもなく、ちょうど良い感じでしたよ？》

レイジングハートの答えはまるで口笛を吹くような感覚であり、ユーノは「はあ……………」とどこか諦めたように溜息を吐き、そして肩を落とした。

（本当に…………ベルディナが側にいるようだよ……………だけど、まあ、気分がほぐれた）

ユーノは誰にも聞こえない声でそつと、「ありがとう、レイジングハート」と呟く。こんな事は絶対に聞こえるようには言わない。これを聴かれてはレイジングハートが増長することもあり、そして何よりもユーノ自身、それを言うのが非常に照れくさかった。

背後の障壁はそんな状況でも刻一刻とその強度を減じている。ユーノをその牙にかけようと、獣がその障壁に爪を立て牙を剥き、まるで鉄が火の粉を上げて削り取られるように、ガリガリと魔力が霧散されていく。

一刻の猶予もないとユーノは判断し、障壁が崩壊に向かわんとする音に次第に焦りと恐怖を表情に浮かべる彼女の、その掲げられた手をそつと握った。

「えっ？」

いきなり手を包み込む熱になのはは驚き、一瞬ではあるが、意識が障壁の維持から外れそうになった。その動揺は魔力の揺らぎに繋がりが、魔力の揺らぎは障壁の揺らぎを誘発し、その強度を下げる結果をもたらした。

（ダメッ！）

動揺は更に動揺を生み出し、未だに諦めることのない犬の攻撃の前に展開された桃色のプロテクションは徐々に徐々に、しかし確実に崩壊へと追いやられていった。打ち付けられる爪によって表面には細かいヒビが走り、次に突き立てられる牙はそのヒビを亀裂へと発展させ、その巨躯の衝撃は亀裂を断層へと導いていく。

かきむしられる衝撃面からは桃色の魔力光がまるで火花のように

閃光を放ち、剥がれて空に舞ったそれはまるで命を終えるはかない桜吹雪のように、吹き付ける春の微風の前に消えていった。

「落ち着いて。今は、バリアの維持をお願い。……巻き込んでしまつて、ごめんなさい……」

削り取られる障壁のように徐々に萎縮していくなのは手をユーノはきつく握りしめた。自分の命、そして彼女の命は今まさに彼女のこのはかなくも感じられる小掌のに握られている。

ユーノはそれを情けなく思う。

自分がもう少し上手く立ち回れてさえいれば、おそらく彼女にこんな恐怖を感じさせず、命の危険など、彼女にはおよそ無縁のものを与える事など無かつたはずだ。

せめて自分ができることは、言葉で彼女を落ち着け、彼女だけでも無事で元に戻るよう、サポートするのみにユーノは自身に言い聞かせた。

「大丈夫、僕が絶対に何とかするから」

ユーノはなのはを見つめた。

「えっ、あ……。う、うん……」

まっすぐと投げかけられる翡翠の眼差しは酷く美しく、そこに映し出されている自身の姿は驚きに満たされていた。

触れる手のひらは、華奢な外見に反して随分とゴツゴツとしており、そしてそれは細かに生まれた傷跡によって多くが鮮血の赤に塗れていた。

恐れ、戸惑い、混乱。緊張に満たされていた鼓動にそれまでとは異なる震えがもたらされる。どこか痛みを伴う脈動になのは思わず空いた手を胸に当てた。しかし、それはどこか心地よく、悪い気分とは思えなかった。

(……綺麗な目だな……)

なのははボンヤリとそう思う。とても落ち着いて何かを考えられる状況ではない。しかし、彼のまなこに映し出され、揺るぎない言葉と、強い手の感触を与えられて、なのはは、不思議で仕方がないと思えるほど冷静になっていた。

《そういえば、今のマスター・ユーノが封印魔法を扱うには、私のサポートが必要でしたか……》
《うっかりしていました》

デバイスがうっかりするとは何事かとユーノは思うが、今はそこを指摘せずゆっくりと肯き。なのはの手を介してようやくレイジングハートと再会を果たした。身の安全を考慮に入れなければ、今の状態でもユーノは封印魔法を扱うことができる。しかし、幼いころからの相棒であり、今となっては姉とも母とも言えるレイジングハートが戻れば、その選択肢はユーノの意識から消えた。

「レイジングハート、バリアの維持と封印魔法の補助。同時に行ける？」

それは、聞くまでもない問いかけだった。

《何を今更。世界最古にして最強のデバイスを甘く見るものはありません。軽く成し遂げてごらんいれましょう》

なぜなら、その答えをユーノは知っていた故に。

「妙なる響き、力となれ……」

すでにこの二者の間には、確認すべき事はなにもなかった。

「悪しき者を封印の輪に！」

それは、彼女を得たときから何一つ変わらず、延々と続けられてきたことだった。レイジングハートは今亡き彼から、ユーノを守り育て導くことを願われ、そしてレイジングハートは総てにおいてそれに忠実だった。

「……すごい……」

今はレイジングハートを握るのはは、そんな二人の石のやり取りを掌に感じていた。

自身の掌を間に入れて交わされる力の波。

それは、酷く暖かで穏やかで、懂れて、今でも心の底から焦がれる温もりだった。

他には何もいらぬ、自分が欲しいと思うものが既にここにある。なのはただそう思った。

翠の魔力は光となりユーノの足もとに輝き、それは、円形を形作り、様々な複雑な幾何学模様を描きながら回転を始める。そこに浮かぶ光の文字は、何が書かれているのかなのはには分らない。おそらく、その文字の源流は既に失われていて、その厳密に意味する所はユーノにも多くは理解できない。しかし、それが人の力となつて今に至る。

多くは争いを生み出し、あるいは目の前で暴走するモンスターの

ように多くの悲劇を生み出す器となり、そして、そこには多くの悲しみをもたらしてきた力であるが、それは同時に希望もまた人々にもたらしてきた。

魔法は人の助けになるが、同時に人の命を奪いもする。それが、彼の父親代わりだった男が時折口に使っていた言葉だった。

「ジュエルシード、封印！」

故に、ユーノはこうして自分が何かを守り助ける魔法が使えることに喜びを感じていた。

たとえそれが、己の身を削ることであっても

翠の光が幾重もの帯となり障壁に阻まれ行動を停止する犬へと殺到していく。それは悉く獣の身体を貫き、人には到底理解できない苦痛の叫び声が風に乗り周囲の木々をザワザワと振るい鳴らせた。

《sealing》

キインと、まるで水が一瞬にして氷へと相転移していくような、甲高く、どこか透き通った音が耳を打ち、そして静寂を取り戻した。

目を上げれば太陽はすでに山の陰に隠れていて、先ほどまで僅かに熱を持っていた微風は夜の冷涼さを携えていた。

気が付けばまるで総てが夢だったのではないかと、なのはは一瞬で変わってしまった世界そのものを見上げ、そんなことを感じた。しかし、手の中の熱と、手を包み込む暖かさはこれは現実のことだとはつきりと伝えてくるようだった。

そして目の前に浮かび上がる菱形の蒼い宝石のようなものは、再びなのはから現実感をぬぐい去るようだった。

《仕上げです。その宝石に私を触れさせてください。けして手で直接触ろうとしませんように》

ユーノの手はまだなのはの手と繋がれていた。レイジングハートの助言を受けて、なのははユーノに目で伺うが、ユーノは何も言わず黙って首肯で答えた。

そして、なのはは手のひらを返し、握りしめていたレイジングハートをユーノの前に掲げた。

掲げられたレイジングハートは何度か明滅を繰り返し、そして直ぐに浮かび上がったジュエルシードと呼ばれる菱形の宝石を取り込んだ。

《格納開始……………終了。ジュエルシードは完全に封印されました。お疲れ様でした》

赤い球体の表面が揺れ動く水面のように震え、そしてその内部から僅かに漏れ出ていた違和感のようなものも、その言葉を境にして一切が消え去った。

冷たい夜風の感触が風に乗り、空には紫から黒に移りゆく雲の群れがゆつくりと彼方へと流れていく。

「終わったの？」

先ほどまで赤く染め上がっていた西の空もいつの間にかその色彩を落とし、宵の暗がりには目に移るものの輪郭を薄ボンヤリとさせ、すぐ側に立っているはずの少年の姿、表情さえもにわかに伺いづらくなっていた。

「うん、これで、安全だ。ありがとう……」

ユーノはその言葉を残し、なのはの手を握ったまま糸が切れるようになのはにしなだれかかってくる。

「えっ！？　ちょ、ちょっと……お、重いよ!？」

いくらユーノが華奢であっても、力の抜けた人というのは非常に重く感じる。なのはは緊張が抜けたのも手伝って、ユーノを支えながら地面に座り込んでしまう。

「大丈夫!？　怪我、痛む？」

「大丈夫……この程度だったら……すぐ、に……」

会ったときから既に限界だったのだろう。ユーノの身体はまるで電池が切れるように徐々に、徐々にその力を失っていき、朦朧としていた翠の双眸はゆっくりと閉ざされていく。

「あ、えっと、ど、どうすれば……」

なし崩し的にユーノを膝枕することになったなのはは、荒い息を吐きながら気を失いつつあるユーノの額を撫でながら、途方に暮れていた。

本来は携帯電話などを使って両親なり兄弟を呼び出せば良いのだ

が、混乱していてそこまで思いやれなかった。何よりも、ユーノの身体からは力が抜けているにもかかわらず、その手はしっかりとなのは手を握ったままで、なのはにしてはひとまず誰かを呼びに行くことさえもできない状態だった。

《仕方ありません、緊急措置を行います。お嬢さん、驚くことのあるりませんよう願います》

「驚くつて、何をするの？」

レイジングハートの言葉になのは手を見おろした。二重に重ねられた手の中のレイジングハートはどのような状態か分からないが、その隙間から紅い光がチカチカと漏れ出す。

《モード・メタモルフォーゼ、サポート開始……》

レイジングハートの表面が何度か明滅し、ユーノの身体の表面に薄い翡翠の光の膜が現れ、それは次第に粒子となってユーノの輪郭をぼやかしていく。

光が晴れたところには、ユーノの姿はなく、なのはの膝の上には、腕に緑色のリボンを巻いた小さな動物が現れた。

「……えっと、フェレット……なのかな？」

小さいながらもしなやかな身体を覆う柔らかな体毛は、今の今まで相対していた彼のハニードロンドの髪とおなじ色彩をしていて、閉じられた目蓋から時折僅かに除かせるその瞳は、彼の身体を包み込んでいた光とおなじ、彼の目の色とおなじ色だった。

彼がフェレットになったのか、それとも単に本来の姿に戻っただ

けなのか。

「……………急いだ方がいいよね？」

なのはは誰に聞くのではなくそう呟くと、膝の上で丸くなって苦しげな息を吐くユーノをそっと抱き上げ、急いで神社を後にした。

第八話 E x p e c t a t i o n

黄昏時も僅かな時間で過ぎていき、通学路からは随分と外れた道も、今ではすでに街灯が光を下ろし、すっかりと夜道を形作っていた。

振り向いた彼方に見上げる神社は暗い闇の中に沈み込み、今ではさつきまで自分たちがどこで戦っていたのか分からなくなっている。夜の山道を歩くことにならずにすんで、なのはは少し安心しながら、徐々に近づいてくる家の光を眺めながら、どんどん心が穏やかではなくなっていくた。

子供が外出する時間ではない。塾帰りなどはもつと遅く、もつと暗い時間になるが、そのときは兄や姉に迎えに来てもらうため心細くはなかった。

ユーノを助けないといけないという使命感が無ければ、おそらく今頃自分は心細さに足を止めて、ただ電柱の隅に隠れて小さくなっていたかもしれない。

なのはは一人でいる時が嫌いだった。寂しいことが嫌いだった。それは、まるで自分が一番辛かったあの頃、泣くことも笑うこともできなかったあの頃を思い出させるからだ。誰もいない家に一人でいて、誰にも迷惑をかけないようにただ一人で黙って待つだけだったあの頃は、もう二度と戻ってきて欲しくない。

あるいは、そのせいだったのかもしれない、となのはは、未だ腕の中で、時折苦しげにうなされるフェレットに目を下ろし思った。ただ一人で、誰の助けも得ることができず、ひとりぼっちで戦う彼だったからこそ、自分は彼をここまで助けたいと思ったのかもしれない。

ない。

肩を狭めて、まるで自分が小動物になったと思えるようにキョロキョロとしきりに周りを見回しながら、ようやくたどり着いた自宅の玄関の引き戸に手をかけ、なのははよつとの思いでホツと安堵の息を吐いた。

「今日は随分遅かったな」

安心したところでいきなり背後からかけられた声になのはは飛び上がりそうになり、振り向くと同時に無意識なのか、腕に抱えたユニノを背中に回した。

「あれ？　なのは、帰ってたんだ……………可愛い子だね。イタチ……………フェレットかな？」

そして、背中を向けた先には、どこかふんわりとボンヤリとした女性の声があり、なのはは観念したように肩を落としてため息を一つ吐いた。どういいわけをしたものか。なのははそんなことを思いながら、困ったような表情を浮かべる兄と姉に続いてリビングへと足を向けた。

リビングのソファには既になのはの両親がどこか神妙そうな、それでいてなのはの無事そうな様子に安堵したような表情を浮かべて座っていた。

ソファの前のテーブルには既に夕食がのせられており、添え物のスープからは僅かばかりの湯気しか立ち上っていない。メインディッシュと思われる肉料理は一つも手がつけられていない様子で、なのはは申し訳ない気持ちでいっぱいになり、両親が何かを言うより

も早くぺこりと頭を下げ、

「遅くなつて、ごめんなさい……」

と謝った。なのはの両親、高町夫妻はそんななのはの様子に表情を、フワリと緩めた。

なのはの後ろに列を作つてそれを見守つていたなのはの兄と姉も、ホツと息を吐いてようやくなのはの隣に並んだ。

高町夫妻、高町士郎と高町桃子はとても優しい性格の人物であるが、けして子ども達を甘やかす人物ではなく。もしも、なのはが謝らずに言い訳を並び連ねることがあれば、少なくとも説教が一晩は続くことだっただろう。

「それで、学校帰りに神社に寄つたらこのイタチ フェレットだったか？ が犬に襲われていて、思わず助けたということか」

なのはの事情を一通り聞いた父、高町士郎はそういつてソファに横にされたフェレット・ユーノに目を落とした。

「うん……」

なのははうなずきながら、嘘をつかなければならないことにすこしだけ心を痛めていた。実際には嘘はついてない。真実をすこしだけばかしただけで自分の説明には嘘はないということは分かっていたが、それでも本当のことを言うわけにはいかない現実を少しいやに思う。

「この子を助けてあげたのは偉いけど、危ないことはしちゃダメよ

？ もしもその野良犬が逃げなかったら、なのはが怪我をしていたんだからね」

なのはの頭を撫でながら諭す桃子になのははますます申し訳なく思い、コクリとうなずいた。

「ごめんなさい、おかーさん」

今にも瞳に涙を浮かべそうな様子のなのはに桃子は「いいのよ。なのははいい子ね……」と言いながら、そつとその小さな頭を胸に抱き寄せた。

「だけど、その子、大丈夫？」

ソファの上でぐったりと眠るユーノの頭を指先で撫でながら美由希は心配そうにその顔を覗き込む。

「外傷はほとんどないな。衰弱しているみたいだが、温かくして栄養を取れば問題はないはずだ」

ユーノの背中や腹を指で探り、時折軽く身体を叩いて診断する恭也の言葉になのははホッと一息ついた。レイジングハートからは、ここしばらくまともな食事を取っていないことと、急激に消費した魔力に身体がついて行けなくなっただけで、生命にただちに問題が生じることはないと言われているが、やはりいきなり気を失ってしまった彼を心配するなど言うのは無理な話だった。

（それに、男の子がフェレットになっちゃったなんて、言えないよ……）

そんなこと言ってしまえば、病院に連れて行かれるのはおそらく自分になるだろうとなのはは思う。

「念のために愛さんの所、行く？」

当分は目を覚ましそうにないユーノの様子に、美由希は知り合いの獣医のことを思い出した。彼女は優秀で面倒見もいい。高町家に住み着いている半野良の猫たちの面倒もよく見てくれるので、任せおけば安心だとも思えた。

「そうだな、一晩様子を見て、それでも目をさまさなかったら連れて行ったほうがいいか」

恭也もそれに賛成し、美由希はうなずきながらなのはに目を向けた。

「だって、それでいい？　なのは」

「えっ？　あ……う、うん」

なのはは反射的に頷いてしまったが、反対する余地はなかった。しかし、人間になれるフェレット（あるいはフェレットになれる人間）相手に、いくら優秀であったとしても一般的な獣医である彼女の手を負えるかどうかはなのはに判断できることはなかった。

「それじゃあ、ひとまずご飯にしましょうか」

という桃子の指示に全員肯いて、なのははタオルでくるまれたユーノを抱き上げた。

さめてしまった食事をとりながら、膝の上に置いたユーノを時折見おろしながら、なのはは様々なことに思いをはせていた。

いったいなにが起ころうとしているのか。彼は何をしようとしているのか。そもそも彼は何者なのか。

しゃべる宝石。フレットになった少年。まるで鎧のような外見になってしまった犬に、その原因と思われる青い菱形の宝石。彼が使っていた、自分も何の因果か使うことになった、魔法のような不思議な力。

それが起こるまで、まるで予想もしていなかった、幻想の物語だけに現れるような事々が、すべて悲壮なまでも現実の重みと痛みを伴って押し寄せてきて、ある意味それは現実感を失わせてしまいそうにもなる。

しかし、逃避するべき現実とは、なのはの膝の上でしっかりと息づき存在していて、その小さな体にはどうしようもない生命の重さがある。それが現実だった。それ以外の現実はどこにも存在していなかった。

いい知れない不安がこみ上げてきて、なのはは思わず逆流しそうになる胃の内包物を必死に飲み込み、そして、同時に興奮にも似た期待さえも感じていた。

第九話 R u i n

目を覚ませばそこには温もりがあった。太陽と潮の混じった風の香りが自身を包み込んでいるようだった。

それはあまりにも優しすぎて、あるいは自分は既に命を終え、死後の樂園に生まれたのかと思えるようだった。

ユーノはゆっくりと面を上げた。

今まで自分を包んでいた柔らかな毛布が頭から滑り落ち、閉ざされていた視界が広がっていく。

差し込む光に眼を細めながら、ユーノは思うようには動かない身体を何とか捻りながら自身の周りに広がっている空間をじつくりと眺め回した。

閉ざされ、守れた空間。前足を伸ばして確かめる感触は加工された木材の堅さで、四方を壁と窓に囲まれながらも漂う和らいだ風は、目の前で眠る少女の寝息だった。

椅子に腰掛け、机にもたれさせた腕を枕に眠る少女は、なれない体勢が災いしているのか、安らいだ寝姿とは言えないが、それでもユーノはその姿に安心を覚えた。

（よかった……無事だったんだ）

あの戦闘はギリギリだった。もう少しこの少女の介入が遅ければ、おそらく自分にはいなかっただろう。それは同時に彼女にも言えることだった。

たとえレイジングハートが彼女の手にあったとしても、マスター登録のしていない人間ではいくら魔力が高くてもジュエルシードを封印することは難しい。本来なら緻密な魔力制御を得意とするユーノであっても、今の状態ではレイジングハートのサポート無しでは封印魔法は使えない。ましてやこの少女はそれまで魔法という概念さえも知らなかったのだから、もしあの時自分が封印魔法を使う余力がないほどに消耗していたら、封印の手段もなくこの少女もまたあのジュエルシードモンスターの凶刃の前に負傷、あるいは命を落としていたかもしれない。

（だけど、これはまだ始まったばかりなんだ……安心ばかりもしてられない）

ユーノは苦しそうに眠り続ける少女、なのはから視線を外し、その側に敷かれたピンクのハンカチの上に鎮座する赤い宝石、レイジングハートに近寄り、そのとがった鼻先でつついた。

『《スリープモード解除。おはようございます、マスター・ユーノ。昨日はなかなかスリリングな一日でしたね》』

つつかれた振動に呼応するように、レイジングハートはしばらく紅い光を明滅させていたが、一秒もたたないうちに休止状態を解除しユーノに念話で挨拶を送った。

側にいるのにわざわざ念話を使うのは何故だろうとユーノは少し思ったが、側で眠る少女のことを考えたレイジングハートなりの気遣いだと直ぐに気が付き、ユーノも彼女にならない念話で会話をすることにした。

『おはよう、レイジングハート。説明してくれる？　ここはどこ？』

あの後僕達はどうなったの？」

『《神社と呼ばれる場所で気を失ったことは覚えていますね？ その後、生命保全のためその姿になったことも》』

ユーノの最後の記憶は、封印されたジュエルシールドがレイジングハートに収納されるまでのことで、それ以降は全く記憶がない。

『うつすらとだけ覚えてるよ。まずいなあ、まだ元の姿に戻れないみたいだ』

ユーノはそう言いながらふさふさの毛並みの手や尻尾を撫でながら呟いた。

過去、一度だけこの形態になったことがある。大人達の後をこっそりとつけて遺跡の中に入ったとき、思わぬトラップに掛かって遭難したときのことだった。

あの時も衰弱を防止するための緊急処置だったが、その後救出された後、一晩程度休めばいつの間にか元の姿に戻っていた。

しかし、今回はそうはならなかった。ユーノは胸に手を当てて内部で鼓動するリンカーコアを感じ取ろうとしたが、そこから感じ取れるものはまるで酸欠を起こした肺のような細かな痙攣のような波動ばかりだった。

『《思った以上に深刻な状況です。変身魔法が何とか間に合ったため、外傷はほとんど残っていませんが、リンカーコアの出力が先日より大幅に低下しています。そうですね、いいところ、通常時の5%といったところでしょうか》』

その報告に、ユーノは絶望のような感情を覚えた。急激な魔力低下とこの世界との魔力の不適合が合わさり、リンカーコアが魔力の

入力も出力もできない状態で萎縮してしまっているということだ。

『封印魔法は使えないね……』

『《今の状態では、逆立ちしても無理でしょうね。私のサポートを受けつつ、自力でジュエルシードを回収し封印するためには、今の状態で魔法を使わず、栄養をしつかり取っ手、最低でも10日間は安静にしておく必要があります》』

レイジングハートの提案はもつともだ。レイジングハートとしては、提案と言うよりも命令したいと思えるような状態だったが、ユーノは彼女の予想通り首を左右に振ってそれを拒否した。

『そんなにゆっくりはしてられないよ。まだ始まったばかりなんだ。まだ3つしか回収できてないだ。後18個も残ってるんだよ？』

大多数はこの国、この街に飛散していて今まさに発動してもおかしくはない。ただの一つでも発動すれば、魔法的抵抗力のないこの世界の人々にどれほどの被害が出るのか。そんななかで、悠長に10日間もバカンスを楽しもうなどということはユーノには考えられないことだった。

『《現実を見なさい、ユーノ。確かに今は一分一秒を争う事態であることは確かです。しかし、今のあなたにできることはない。事実、あなたはそのような身体で一体どうするのですか？ 犬死にが関の山です》』

『それでもだよ、レイジングハート。それでも、やらなきゃいけないんだ。それに……』

ユーノは側ですやすやと眠るなのはに目をやった。二度の邂逅を果たし、そのたびに手を差し伸べてくれた少女は、ユーノにとって心安らく存在だった。こんなに優しい子がいるこの世界を絶対に壊してはいけないと思えたからこそ、ユーノは心を折らずにいられた。だった。

『これ以上巻き込んだらだめだ。この子は、何の関係もないんだから』

ユーノはフェレットの姿になっても腕に巻き付けられている緑のリボンをそつと撫でた。

『《それはそうですが……………まあ、巻き込んでしまったのは仕方のないことではありませんか。このお嬢さんも、自分からあなたを助けたいと言っていました。今は助けを求めるべきではありませんか？ それとも一つ、このお嬢さんの魔力は、完全状態のあなたの魔力をいくらか凌駕しています。これもまたベルディナの導きと考えるのも悪くはないと思われます》』

『それは…………』

ユーノは言葉を詰まらせる。それは、彼も考えなかったわけではない。

あの時、自分を守った桃色のプロテクションを初めて見たとき確信したことがある。

この子は、もの凄い魔力と才能を持っている。おそらくそれは、ユーノなど足もとにも及ばない程のものであることは言うまでもなく、さらには、レイジングハートとの相性も自分などとは比べものにならないほどに抜群であろうことも。

もしも彼女が正式にレイジングハートのマスターとなり、ジユエ

ルシードの回収に関して協力を求めることができれば、おそらくは何の問題もなくそれを実現してしまえるだろうということも、彼は予想することができた。

だったら、何を悩むことがあるのだろうか

魔が差したようにユーノは眠りこける少女の方へと視線を戻した。そして、その思考はコンコンと扉が叩かれる音によって遮断された。

ガチャリという軽快な音を立てて開かれる扉に、

「なのは、そろそろ起きないと学校に遅れるわよ」

という柔らかな、とても暖かみのある声を伴い一人の女性が少女なのはの眠る部屋に足を踏み入れた。

「まあ、なのはったら、こんなところで寝ちゃって……」

机に突っ伏すなのはを見て苦笑いをする桃子はその側でちょこんと座り自身を見上げるユーノに気が付く。

「あなたは起きてたのね。元気そうで良かった」

桃子はユーノの頭を指の先で優しく撫でた。ユーノは何となく照れくさくなり、モゾモゾとタオルに身体を隠してしまった。

（照れてるのかしら？　可愛いわね）

桃子は、もじもじしながらもチラチラとこちらを伺うユーノを思わず抱き上げてしまいたくなる衝動を抑え、未だ眠りこけるなののは肩をそつと叩いた。

「ん~~~~」

次第に揺さぶられる肩の感触に、なののはうるさそうにうなり声を上げながら、何とか上体を起こし、意志に反して閉じようとするまぶたをこすった。

「なののは、ちゃんと起きないと……ほら、あの子も呆れてるわよ」

桃子の笑い声になのは「あの子？」と胡乱げに机に目を向けると、そこには半身を洗い立てのタオルを身にまとい、チラチラとこちらに目を向ける小動物　ユーノの姿が目映った。

「ああ！　起きてこれたんだ、よかったあ……」

なののはホッと一息つきながらユーノを抱き上げ安堵の笑みを漏らした。ユーノはその優しい笑顔に少し頬を染めつつ、何も言わずにぺこりと面を下げる。

フェレットが頭を下げるという光景は、何とも奇妙なものだったが、なののはむしろそれを愛らしく思った。タオルの裾からちょこんと顔を出す鼻先を指先でチョンとつつくなののはを、桃子はほほえましく思う。

「よかったわね、なののは。それじゃあ、ご飯にするから顔を洗って下りてらっしゃい」

桃子もじつとなのはを見上げるフェレットのユーノの頭を指先で軽く撫でて部屋を後にした。

朝食を終えて昨晚やり損なった学校の準備を整えるため、なのはは少し早めに食事を切り上げ、部屋に戻った。

部屋の中程の壁際に立てかけてある身長ほどもある鏡の前で最後の身支度を調えながら、なのはは机の上で簡単な朝食をほおばっているフェレットのユーノをチラチラ見ながら、これからどうしようかと考えていた。

彼が目覚めてから二人は具体的な話を何もしていない。朝食のために階下に降りるときも、部屋に戻り、もったいぶったようにゆっくりと身支度を調えている今も、ユーノからは何も言葉が発せられないことに、なのははすこしだけでもどかしく思っていた。

聞きたいことは多くある。昨日の犬はいったい何なのか。その体から出現した青い菱形の宝石はいったい何なのか。そもそも、彼はいったいなものなのか。どうしてあんな生命の危険に身をさらしていたのか。

髪を結ぶ緑色のリボンを、なのははもう三度も結びなおしながら、横目でユーノを見た。彼はおそらくその視線を知っているのだろう。しかし、彼はそれでもなお口を噤み、むしゃむしゃと愛らしく丸いビスケットをかじるばかりだった。

その様子にそばに置かれた赤い宝石、レイジングハートはため息をつくような様子でチカチカと明滅しているが、ユーノはそれも見

ないふりをしているようだった。

「えっと……」

もう、整えるべき身支度も無くなってしまい、そろそろ時間も限界になってしまった。なのは机の片側につり下げてある鞆を持ち上げ、未だこちらに目を向けようとしない彼に声をかけた。

ユーノは無言ではおぼついていたビスケットから口を外し、その翠に輝く双眸を持ち上げた。フェレットの瞳から感情を読み取ることには不可能に近い。しかし、なのは何となく彼もまた自分のように迷っているのではないかと感じていた。聞くべきか聞かないでおくべきかと悩む自分と同じように、彼もまた言うべきか言わないでおくべきかを悩んでいるのではないかとなのは感じた。

「私、これから学校だから……」

そっぴうなのはに、ユーノはコクリとうなずいた。

「うん、分かった」

ほぼ半日ぶりに聞くその声は少し緊張しているような印象だった。そして、その声は助けようと思った少年の声そのもので、なのはは少し安堵を覚えた。

「えっと……そっぴだ、お昼ご飯はおかーさんをお願いしてるから」

後ろ髪が引かれるようだった。このまま家を出て学校に行き、帰ってきた時には、彼はすでにここからいなくなってしまうのではないかという不安をなのはは拭えずにいる。

いなくなればまた探せばいいとも思う。しかし、彼がまた昨日のような生命の危険に晒されたとすれば、もう一度あえる保証は無いのだ。

「うん、ありがとう……ごめんね、迷惑かけて」

「い、いいの！ 私が、したいからしてるだけで……えっと……ユーノ君が気にすることは無いんだよ」

しどろもどろに手を振って否定するのはを、ユーノはその優しさに頭が下がる思いだった。

「だから……帰ってきたら、お話聞かせて……ね？」

それは真摯な願いだった。勝手にいなくならないで欲しい、他人事にしたくないという強い意志が込められた言葉だとユーノは感じた。

自分はそれを払いのけることができるのかとユーノは思い、なのはから目をそらした。

「分かったよ、レイジングハートを持って行って。そうしたら、離れてても話ができるから」

その視線の先にたたずむレイジングハートはユーノの声にとぼけるようにチカチカと赤い光を明滅させる。

なのははそれにうなずき、ハンカチの上に置かれたレイジングハートをつまみ上げ、階下から響く姉の呼び声に答え、「行ってきたま

す」と言つて部屋を出た。

ゆっくりと閉じられた扉の音が余韻を残し、小さな部屋に静けさが戻った。カーテンの開いた窓からは春の朗らかな陽光が差し込み、穏やかな熱が部屋に漂うようだった。

ユーノは机から飛び降り、ベッドを飛び越え窓際へと降り立つ。眼下に広がるのは、取るに足らないと思うような、ただの日常を謳歌する人々の流れだけ。そして、そこを、どこか浮かない顔をして歩く一人の少女の姿が決定的に感じられた。

彼女の日常は崩壊してしまった。そのきっかけとなった自分はどれほどの罪深いかと思えば、ユーノはこちらを見上げる彼女のまなざしを直視することができなかった。

第十話 Antinomy

優章 第十話 Antinomy

思えばなぜ、自分はこうまでして彼にこだわるのだろうか。

なのは送迎バスに揺られながら、流れる風景に目を向けながらふとそんなことを思った。

今朝は親友の二人、アリサとすずかはバスには乗っていなかった。時々あることだ。二人は普通とは少し違う事情を持つ家に生まれたため、そういうこともあるらしいという話だが、なのははその事情を思いはかることはできない。

そういうときばかりは自分と二人はやはり違う世界に生きているのだなと思ってしまう。そう思ってしまう自分が嫌いだった。

では、二人はどう思っているのだろうかとなのはは思う。やはり二人も、彼女たちは自分とは違う世界に生きる人間なのだと思う時があるのだろうかとなのはは時々考えることがある。それは、全く理にかなわない考察であることは、幼い彼女でも何となく理解できることだった。

では、彼はどうなのだろうかとなのはは思い浮かべた。夢の中で助けを求めた彼。その声はあまりにも悲痛に染め上げられていて、思い出すだけで胸が締め付けられる。

しかし、その助けを求めたはずの彼は、結局はなのはに助けを求めようとはしなかった。

彼はいったい何者なのか。彼を悲しませるものとはいったい何なのか。彼はなぜ、それを胸の内にしまい込んでいられるのか。

ユーノ・スクライア。

バスに揺られるあいだに、念話と呼ばれる一種のテレパシーによって自己紹介し合ったときに聞いた、それが彼の名前だった。

『それじゃあ、フェレットさんになっちゃったのは……』

レイジングハートを媒介にして、なのははユーノと言葉を交わし続けた。

『うん、この姿の方が魔力と体力が早く回復するんだ。僕の部族の緊急避難の魔法一種。使う人は希だけどね。だから、僕は人間だよ。そこところはよろしくね』

『う、うん。分かった……』

何となく必死な、憤ったような口調で熱弁を振るうユーノになのは少ししどろもどろになりながらも何とか念話で答えを返す。

こうなってしまったのも、なのははが不用意に、「ユーノ君ってフェレットさんの？ それとも人間なの？」と聞いてしまったことに原因がある。そのため、これはある意味自業自得であるといってもいい。

『ごめんね、ユーノ君』

ともかくそれでユーノを傷つけてしまったのかもしれないと感じたなのはそう謝った。

『あ、いや……その……僕もごめん。なんだかきつい言い方になっちゃって』

『そんなことないよ』

あれをきつい言い方というのなら、親友のアリサの言動なり罵詈雑言になっってしまうだろう。

「いやいや、こちらこそ」「いやいやいや……」「なにをおつしやいますやら」などというやり取りを延々と繰り返す少年少女二人にレイジングハートはなのはのポケットの中で「ヤレヤレ」とため息のように光を明滅させると、

『《コントはもうよろしい。いい加減、話を進めなさい、二人とも》』

と、まるで二人の姉のような母のような苦言を呈した。

『「めんなさい」』

二人の声が重なり、閑話休題となった。

バスは予定通り学校に到着し、なのはは校舎に設えられた大時計の針を眺めながら、ゆつくりとした足取りで教室に向かう。その間にも粗々とした説明をユーノから受け、時々話があちに逸れてはクスクスと笑ってしまい、周りのクラスメイトから怪訝な顔で見られたり、こっちに逸れては瞳を輝かせレイジングハートからお咎めを受けたりと忙しかった。

端的に言えば、多感な少女にとって異世界から来たという少年の話はまるでおとぎ話や空想のアニメーションの世界そのもので、言葉の端々に興味を持ってしまうのは致し方のないことだった。

『それで……ジュエルシードはとても危ない物なんだね？』

『うん……暴走したらなにが起こるか分からないらしいだ』

「らしい」というのはおそらく彼も詳しいことは分かっていると言っているのかもしれないのはは幼いながらにそう理解した。

初夏の日差しの中、窓外に広がる青空に広がる白い雲は風に流され、緩やかにたなびき流れていく。

海で生まれた風は陸の木々を静かに靡かせながら山へと登り、やがて空へと消えていく。

眼下に広がるのは、ただ平穏な風景。

そこで過ごす人々はその当たり前の生活が明日もずっと続いていると、何の疑いも持たずに生きている。その中で彼はその人々のために、ただ一人で危険に立ち向かっていた。

『昨日は巻き込んでしまって、本当にごめん。迷惑を重ねるみたいになるけど、しばらく……僕の魔力がある程度回復するまでなのは家において欲しいんだ。一週間……いや、五日もすれば大丈夫になるから……』

『それで……その後はどうするの？』

『その後は……また、僕一人でジュエルシードを集めるよ』

なのははそつと目を閉じた。その言葉は予想していた通りのものだった。おそらく彼は誰の助けも求めようとしないだろうとなのはは想像していた。あの神社で再会したとき、彼は身も震えるほどに恐ろしい姿をした獣を前にしていたにも関わらず、その口から出さ

れた言葉は謝罪の言葉だった。

命の危険にさらされていたにもかかわらず、援軍として現れた自分に対して彼は安堵の言葉の一つもつかず、その言葉にあったのはただひたすらに申し訳ないという感情だけだった。

なのはには理解できない。もしもそれが自分なら、たとえどれほどに頼りない加勢だったとしても、^{わら}藁をつかむようにすがりついていただろう。それほどに怖かった。鋭い牙を剥き出しにして襲いかかってきたそれは、一つ間違えば容易に命を奪うものに違いない。事実、彼はあの時死を覚悟していたように思える。命がなくなってしまうかもしれないと思えば、ペンを握る手が震えてしまう。しかし、そんなことだからこそなのはは彼を放って置くわけにはいかなかった。

『……………』

『……………ユーノ君？』

言葉がとぎれた。彼の名前を呼びかけてもかえってくるのはノイズすら乗らない静寂だけだった。

『《どうやら、寝落ちのようですね。しょうがない子です》』

ヤレヤレというため息が非常によく似合いそうな口ぶりのレイジングハートになのはは少しかホッと胸をなで下ろした。

ユーノを放って置くことはできない。できる限りの助けになりたい。しかし、怖いとなのはは思う。最初に出会った夕焼けの道では彼は浅くはない傷を負っていた。そして、二度目に会った丘の神社では彼は満身創痍と言えるほどに傷ついていた。ここで別れれば、

次はものを言わない姿で再会するかもしれない。ともすれば、再会する機会さえ得ることができないかもしれない。そう考えれば心臓に針を突き立てられたような感触をなのは感じた。

しかし、それは簡単な決意ではない。

その未来が彼だけではなく、自分にも降りかかるかもしれないのだから。

授業終了のベルが鳴り、挨拶と共に教卓で弁を振るっていた教師がクラスを後にする。そして、教室の空気はゆるみ、早速友達と集まって雑談をするもの。短い休み時間でも精一杯遊ぶために教室を飛び出していくもの。緩やかであり、華やかであり、そして賑やかな日常がにわかになのはの周りに戻ってきた。しかし、今のなのはその空気に素直に同化することは到底できなかった。

休み時間が終わり、授業が始まり、昼食を済ませ、午後の授業が始まってユ一ノが目覚める兆しはなかった。

ユ一ノが答えないことに、なのはは少し安堵もしていた。なのはの意志はまだ決まっていらない。ユ一ノを助ける怖さと助けない怖さの二つが蟠りとなっていつまでも消えてくれない。もしもこの状態でユ一ノと向き合えば、おそらく彼の意志が決まってしまうだろう。せめて、自分の中に明確な答えが出るまで待っていて欲しいとなのはは切に願わずにはいらなかった。

第十一話 E n l i g h t e n

夕焼けに染まる紅の海原は空の鏡だ。

放課後の帰り道、いつものように友人達と寄り道がてらふらりと足を伸ばした堤防の上で立ち止まり、なのはは次第に薄くなっていく空を見上げながら、僅かに感傷の混じる眼差しを海に向けていた。

『《マスター・ユーノは良く空を見上げていましたが、あなたは海を眺めるんですね、なのは嬢》』

隣で静かな歓声を上げる友人、アリサとすずかの声を聞きながら、なのはは脳裏に響く声に耳を傾けた。

『そうだね。海は好きだよ』

海鳴の街はその名が示すように豊かな海に面した街だ。400年程昔には海運と漁で栄えた港町だったらしい。

今となつてはその様相も薄れ、どこにでも有るようなありきたりな、少しだけ観光資源に恵まれているような、当たり前前の街になつてしまった。

しかし、そこに住む人にとって街と海とを切り離して考えることはできないようでもある。

汽笛を鳴らす遊覧船が地平線の手前をゆったりと進む。

隣に立つアリサなどはそれに向かって大声を出して手を振ってるが、その声はおそらく向こうには聞こえていないだろう。しかし、定期的に響いてくる重苦しい笛の音は、まるでアリサの声に応えているように思えて不思議だった。

防波堤に敷き詰められたテトラポットが切り刻む細かい波の音は車通りの少ない海岸道路に静かに響き渡り、沖から流れる塩辛い風は生まれ始めた白波と共に、やがて夜のとばりを運んでくるだろう。海鳥の姿はなく、道路を挟んで直ぐ背後にそびえる削り取られた山の頂上の空には夕日に照らされ、赤く染まった野鳥の群れが、まるで身を寄せ合うように飛び交っている。

「そろそろいこっか？」

アリサの向こう隣で飛びたっていく鳥達を眺めていたさすががその声をかけてきた。

「そうね。ちょっと寒くなってきたし」

隣のアリサも今まで遊覧船に向けていた視線を陸に戻し、まだ赤い空と海を眺めるなのはを横目でチラリと眺めた。

「うん、お腹空いちゃった」

寄り道は禁止されていないとはいえ、このままでは家に帰るころにはすっかりと暗くなってしまうだろう。

普段はあまりうるさく言わない家族であつても、今日ばかりは少し怒るかもしれない。それでも、なのはは時間が欲しかった。

「なのは……なんか、悩みでもあるんじゃないでしょうね？」

照れくさそうにお腹を押さえて微笑むなのはの笑みは、アリサから見ればどこかはかなく、弱々しいと感じられた。

このような雰囲気を出すときは、この親友がなにか人に言えない悩みを持っている証拠だということを、彼女は経験的に知っている。にているのだ。アリサとなのはは。表面的には正反対といえる二人でも、そのうちに秘めるものは同類といえるものだ。と彼女は感じている。それは、なのはただではなくそれはすずかも同じ。

故に、アリサはこう問いかけながらも与えられる答えをすでに理解していた。それは誰かに弱みを見せたくないという、彼女の今よりも幼い頃に心に刻み込んでいた、今ではばかばかしいと思える感情とは違う。

自分たちを親友と思う故の板挟みの中にあることをアリサはすでに理解していた。

（つていつても、納得なんてできないんだけどね……まったく……）

面倒な親友を持ったものだ、と口を閉ざして足下でしぶきを上げる細い波を眺めるばかりのなのはを横目で眺め、アリサは小さく面を振った。

「……いこつか？　アリサちゃん、なのはちゃん」

答えに窮するなのはにそつと投げかけられたすずかの声に、アリサは仕方がないと肩をすくめ、「行くわよ」という一言とともになのはの手を取り海に背を向けて歩き出した。

事情を話してくれないなのはに対する不満を、アリサは確かに感じていた。しかし、重要なことは、自分はいつまで冷静に親友を待っているかが問題だとアリサは思う。

すずかのように冷静で心優しいわけではない、ある意味短気な自分が、いつまでこの親友を信じて待ち続けていられるか。アリサは、手を繋ぐ自分たちを見つめているすずかの暖かな笑みを眺めながら、

そつと溜息を吐いた。

親友に心配をかけてしまっている。そんなことはとくに分かっていることだった。しかし、今のなのはにはそれに答える言葉を持ち合わせていないのも事実だった。

隠し事をしている自分は果たして彼女たちの親友と言えるのか。それを考えると膝が震える。しかし、彼女たちは自分が隠し事をしていること知っていてなお自分の答えを根気強く待ってくれていることは確かだった。

《今はその厚意に甘えておけばよろしいでしょう》

そのことを察したのか、帰り際にレイジングハートが口にした言葉になのはは肯くことはできなかった。

黄昏時が訪れるころに帰宅したなのはは、既に夕食のために一時帰宅をしていた両親と姉姉に迎えられ、少しだけ元気をもらいながら早い夕食に舌鼓を打った。

夕食が終わり、団らんも過ぎて両親が店に戻り、なのはは早めの風呂をもらい、自室に引き込んだ。

なのはが帰宅する少し前に一度だけ目覚めたというフェレットのユーノは、傍らに食べさしのビスケットをおきながら眠り続けてい

る。

その表情も少しだけ血色がよくなっているようになのは感じられ、安心しながらも、未だ人の姿に戻れない彼の状況はまだまだ深刻なのだろうというレイジングハートの言葉に弛んだ表情を引き締めた。

明日には間違いなく目覚めるだろう。そして彼はそのままどこかに行ってしまうかもしれない。行動さえできればユーノは強かに生きていくことができる。彼は、今までそうして生きてきたとレイジングハートは言っていた。

そして、それを止めることは生半可なことではできないとなのは分かった。

だったら、自分はどうすればいいのか。どうしたいのか。

答えは半分以上出ているようなものだったが、それでもなのはに最後の一步が必要だった。

「お休み、ユーノ君、レイジングハート」

幾分か穏やかな寝息を上げるフェレットのユーノの背中を、起こさないようになるべく優しく撫でながら、なのははその傍らにレイジングハートを置き、自身も寝間着に着替えベッドに潜り込んだ。

いくら幼い少女とはいえ、まだ眠気が襲ってくるような時間ではない。しかし、一日中神経を張っていたなのは随分と気疲れをしていた様子で、目を閉じれば何かをじつくりと考える暇もなく眠りに落ちていった。

フクロウの鳴き声も獣が月に吼える声もない。傍らから聞こえるものは、窓の外から漂う僅かな風が木々を緩やかにかき鳴らす音と、それに混じって部屋を横切る少女の寝息だけだった。

夜更かしの猫もそろそろねぐらに戻ろうかと思える程度の夜が漂っていた。

ユーノは眼を細め上体はあくまで低く保ちながら、まるでイタチを警戒するウサギの如く、ゆっくりと周囲に感覚を配らせていた。

外敵は存在するはずもない。四方を守られた空間は閉塞と同時に安心感を与えるものであるはずだが、どういう訳かユーノは強い危機感を捨てられずにいた。

流動のない空気の中に心音のような不気味な脈動が混ざり、それは徐々に強くなっていく。

「……発動、するんだ」

反応は随分と弱い、しかし、確実にそれはおきつつあるとユーノは確信した。

《微弱ですが、観測結果はクロですね。ジュエルシード発動時の固有魔力振動と9割以上一致しました。本格発動にはまだ猶予はありそうですが、急ぐにこしたことはないでしょう》

ユーノの覚醒と同時にスリープ状態を解除したレイジングハートはユーノの言葉を裏付けるように音声を放った。

「急ぐっ」

《了解しました、マスター・ユーノ。しかし、なのは嬢はどういたしますか？》

レイジングハートの言葉にユーノは窓際のベッドで眠る少女、なのはに目をおろした。

「ありがとう……とても嬉しかったよ……」

できれば、おきているときに面と向かって言いたかった。しかし、今は時間がない。

これが今生の別れになるかもしれない。もしも、自分が駄目なら、願いを託すかもしれない。願いを託すことができる人がいることは、気休め程度ではあるがユーノの心に余裕をもたらすものでもあった。

いまだ小動物の姿から人間の姿に戻ることはかなわない。しかし、誰にも知られることなくここより立ち去るにはこの上なく都合の良いことでもある。

ユーノは傍らに置かれたレイジングハートの掛紐を細い首筋に通し、もう一度眠るなのはに視線を送り、そしてそのそばの窓から静かに部屋を後にした。

そして、なのはは目覚めた。わずかに開かれた窓の狭間から細く差し込む夜風が冷たく頬を撫でる。

朧気に浮かぶ視界の先には空っぽの机。

胸に響くのは重い脈動の感覚。

心臓の近くにつながれた細い糸の感触はまるで自分を求め、そして導いているように思えた。

夢うつつに見た彼の最後の表情は、儚い笑みだったように思えた。たとえ止めようともおそらく彼はそこへと向かっていくのだろう。

なのははゆつくりと上体を持ち上げ、冷たい夜風の向こうに輝く月を見上げた。

「行かなきゃ……」

そしてなのはは決意を胸に抱きしめた。

第十二話 THE Moment of Truth

耳が痛くなるほどの静寂が広がっていた。

空から落ちてくる風は不気味なうねりを纏い、まるで小さな彼の身体を押しつぶそうとしているようだった。

低い視線から見上げる石造りの建物は、一般的な家屋に比べれば明らかに大きく、日中には小さな少女達が歓声を上げて共同生活を営む場所であるはずだった。

《なのは嬢の学校ですね。まさか、これほど近くにいても気が付かなかったとは》

「うん、やっぱりジュエルシードはやっぱりかいだ」

大気が僅かに脈を打っているようにユーノは感じた。

発動するまで……少なくともその寸前にならなければその存在すら感じる事ができなかった。先手を打つことができず、自分たちができることは既に起こってしまったことに対応することのみに限られる。

（本当に、自然災害みたいだね）

そして、起こってしまったわけなければどれほどの被害をもたらすかわからない。

そのため、その対処は常に万全に行わなければならない、常に万端に備えておかねばならない。それがロストログリア 危険な古代遺物を扱う上での必要条件でもあるはずだった。

《しかし、今の状態は完璧にはほど遠く、救援もめどさえなく、そして災害は今日の前で起ころうとしている……やはり、なのは嬢に助けを求めた方がよろしかったのではありませんか？》

首に巻かれたレイジングハートの言葉にユーノはうつむく以外のことができない。

「だけど……やっぱり、あの子を僕の勝手な事情に巻き込むわけにはいかないよ」

どこまで強情なのかとレイジングハートはできる物なら頭を抱えたかった。この状況、この現実にもなおユーノは自身の意志を曲げようとしない。

ジュエルシードの発する魔力波はいつしか振動となってレイジングハート自身のセンサーをに揺さぶりをかける。まるでそれに煽られたかのように徐々に強くなっていく空気の流れは、既に終わりへのカウントダウンが開始されているように思え、レイジングハートの回路は《caution》のマークをうるさいほどに鳴らし始めた。

《現実を見なさい、ユーノ。誰にも頼らず、何者にも助けを求めずして今のあなたに何ができますか？ せいぜい、意地を通すことしかできないでしょう。それによつてはらわれる犠牲を、あなたは容認できるのですか？》

彼が意地を通そうとする理由をレイジングハートは実によく理解していた。その先にある結果さえもレイジングハートは正確に予想することができる。厳密なシミュレーターにける必要もなく、その先に待つのは破滅だけだろう。それはユーノだけではなく、おそらくこの世界の全てを巻き込んだものになる。

「……」

《しかし、それもやむを得ないことなのかもしれませんね。ジュエルシードがこの世界にまかれてしまった時点でそれは決定的になつてしまったのかもしれませんが。それでも、あなたが意地を貫き通すというのなら、私はそれに従い、ただひたすらあなたに付き従いましょう。ご決断を、マスター・ユーノ》

少し喋りすぎたとレイジングハートは思う。自分がわざわざ言わなくとも、聡明なユーノであればそんなことは既に承知していることだろう。いや、彼ほど聡明でなくとも眼前に広がる状況を前にすれば誰にでも判断のつくことだろう。

カウントダウンがゼロに迫る。

しかし、変えられない状況と未来を前にしてユーノは齒を食いしばりただ立ちつくすことしかできない。せめて被害を食い止めるための結界を張ろうとしてもその力さえも残されておらず、そして物語は終焉へと一步を踏み出した。

「ユーノ君！」

「えっ？」

そしてユーノは聞こえるはずのない声を聞いた。振り向いた彼のまなこに一人の少女の姿が飛び込む。苦しそうに胸を押さえるのは、ジュエルシードが織りなす強い魔力の波動にあてられているのか、あるいは体力を酷使して駆けつけたための弊害か。

少なくとも幕引きまではまだ猶予が残されている。あるいはこれが幕開けなのか。

立ちつくす二者の間を一陣の風が通り抜けた。

「どうして、キミが……」

ここにいるのか、とユーノは続けようとした。しかし、その言葉は突然しゃがみ込んできたなのはのまなざしに遮られた。

「？キミ？じゃないよ、ユーノ君。私は高町なのは。なのはって、ちゃんと名前で呼んで」

僅かに細められた彼女の視線はまっすぐとユーノに突き刺さり、ユーノはただ肯くことしかできなかった。

「えっと、なのは……もしかして、怒ってる？」

後ずさりそうになるユーノになのはは少し呆れたように溜息を吐き、今度こそ逃げられないようにと彼の両脇に手を入れ、ゆっくりと目線の高さまで抱き上げた。

「うん……怒ってるよ。どうして一人で行っちゃうのとか、どうしてそんな無茶をするのとか……色々あるよ……」

なのはの率直な言葉にユーノは俯いた。あまりにも無責任なことをしているという自覚はユーノにもあったのだ。

しかし、ユーノは謝らなかった。無責任ではあっても、自分はそれを選んだ。それを間違いであるとは彼は思わなかった。

「だけどね、一番許せないのは　そんなユーノ君に何もできなかった私」

なのははユーノに手を差し伸べておきながら、結局はそのまま何もできなかった。決断の時間は少なく、同時にそれは彼女の思考の限界を超えていた。

僅かな時間さえも与えられず、状況は刻一刻と変化して、立ち止まれば置いていかれる。そのような決断を迫られることは、なのはにはあまりにも過酷なことであっただろう。

それでも、何とかして彼を助けたい、その思いに揺らぎはない。

どう助ければいいのか。自分に何ができるのか。堂々巡りしかない思索の中では結論を導き出せなかったが、少なくとも彼女はこうしてここにいて、小さな彼をその手に抱きしめている。

「昔ね、おとーさんが言ってたんだ。『困ってる人がいて、助けられる力があるなら迷っちゃ駄目だ』って……………だから……………私は、ユーノ君の助けになりたい」

なのははもうそれ以上何も言わず、目をそらしてまだ葛藤の中に埋没しているユーノを見つめ続けた。

最後の一步はユーノに任されている。運命もまた、それに託された。

ユーノは面を上げた。その表情にはまだ迷いが浮かんでいるようだったが、それでも彼はしっかりと目蓋を開き、そのエメラルドの

ように輝く瞳をまっすぐなのはに向けた。
それはとても強い光だった。

「僕は……自分が間違ってるとは思いたくない。ジュエルシードは絶対回収しなくちゃいけないし、これは僕自身の手でしなくちゃいけないことなんだ。そうじゃないと、僕は………自分を許すことができない」

ユーノの脳裏に一人の人物が思い浮かぶ。物心ついてからずっと側にいてくれた彼の表情は、思い出の中では常に楽しそうな笑みを浮かべていた。

それを取り戻すことはできない。

「だけど、今のままじゃ、僕は何もできない。悔しいけど、それが現実なんだよね……」

それは自分に言い聞かせる言葉だった。

「だから……お願いします。僕に力を貸してください」

そしてその言葉は力強い響きとなり、なのはへと届けられた。

「うん！ 私、頑張るよ！」

二つの運命はこれにより一つとなった。

なのはは立ち上がり、改めてユーノを胸に抱き、そして不気味に佇む校舎を見上げた。

「それで……私はなにをすればいいの？」

夜空を背負う石造りの校舎の中程に、菱形の蒼い宝石が姿を現せつつある。

「ジュエルシードのことは、昼に説明したとおり。あれを安全に封印させる必要があるんだ……なのは、これを」

なのははユーノを見おろした。

「レイジングハート？」

ユーノが口に咥える赤い宝石がようやく水を得た魚のように一際強く身を輝かせる。

「ジュエルシードを封印するには、レイジングハートに入ってる封印魔法を使うしかない。今の僕では使えないから、なのははに欲しいんだ」

「うん、分かった」

なのははレイジングハートを受け取り、ギュッと握りしめた。託されたものは道具だけではなく、ユーノの思い。彼の小さな双肩に担われた物を、僅かでも肩代わりするために、なのははそれを受け入れた。

《それでは、私の起動パスワードをお願いいたします》

それまで沈黙を保っていたレイジングハートはようやく訪れた順番に、システムを開放しジュエルシードの封印のためのプロセスを

全て立ち上げた。

「そうだね、じゃあ、なのは。今から僕が言う言葉を言って」

「分かった」

力強く肯いたなのはの腕の中から飛び出した彼はそのままなのはの肩へと乗り移る。

目の前に広がる光景、そして自身の手の中で暖かな熱を灯す宝玉はとても現実のこととは思えない。夢物語、おとぎ話の世界に迷い込んだアリスの如く、それは今までの全てを超越しすぎていた。

しかし、肩にかかる重みと熱、驚くほど軽い身体に確かに息づく命の鼓動はたしかにここにある。なのはの小さな双肩にそれは託された。

「我、使命を受けし者なり」

「われ、しめいをうけしものなり」

ユーノの優しい声がささやきのように耳朵をふるわせ、なのははそれとともに言葉を紡ぎ出す。

「契約のもと、その力を解き放て」

「契約のもと、そのちからをときはなて」

次第に一体化していく二人の声は祈りの言葉となり大気をふるわせていく。

「風は空に、星は天に、そして不屈の心は……」

「風はそらに、星はてんに、そして不屈の心は……」

不思議な感触だった。最初はただ漫然と彼の言葉を繰り返し口に
出しているだけだったものが、それは次第に重なり混じり合い、い
つしかなのは今紡ぎ出された声が自分の声なのかはたまた彼の言
葉なのか、区別がつかなくなっていた。

『この胸に！』

しかし、それを不思議に思うことはなかった。まるで自然で当たり
前のことのように、生まれたときからそうしてともにあった言葉の
ように思えた。

『この手に魔法を。 レイジングハート、セット・アップ』

光の柱が天空を貫いた。星々の輝きよりもさんさんと照らしつけ、
太陽よりも優しい光が体を駆けめぐり立ちのぼる。

「これって、神社の……」

手のひらで輝くレイジングハートの真っ赤な輝きはまるで大空を
羽ばたく大鷲のごとく誇らしく、そして、なのはにとってこの光は
はじめて彼を守ることができた救いの輝きだった。

《パスワード承認。起動プロセスの実行開始……………まるで遠い昔
を思い出すようです。もっとも、私のメモリーには残されてはいま
せんがね……》

自身の回路を焼き付くさんとする莫大なプロセスの流れは、ある
いは歓喜の念なのかもしれないとレイジングハートは判断する。レ
イジングハートにとってもこのときは、目覚めたときより待ちこが
れた瞬間だった。

《では、改めましてマスター・なのは。最終プロセスの入力をお願いいたします》

「えっと、私はどうすれば……」

「おちついて、なのは。思い浮かべるんだ。君を守る、君自身の防護服の姿と、君が担う杖の姿を。レイジングハートを信じて」

「思い浮かべる……」

最初に思い浮かべたものは、夢の中で見た彼の戦闘装束。そして想像する物は、そのそばで杖を持って戦う自身の姿。使命と責任。担う物と守るべき物。それにそぐう自身の姿を思い浮かべ、そのイメージはたちどころに姿を現し、なのはの脳裏に鮮明な姿で思い浮かべられた。

堅牢であるべきだ。決してくじけない姿を現すべきだ。きらびやかであるべきではない。自身を飾るものは不屈の心のただ一つでいい。そして、守るべき使命を果たすための姿は、ただ一つしかない。

《最終プロセスの入力を確認。万能型単独決戦用デバイス【レイジングハート】起動！》

立ち上る桃色の魔力は収束をはじめ、それはまるで光の繭のごとくなのはを包み込む。

そのプロセスからはじき出されたユーノは、その暴流ともいえる魔力の固まりを見上げ、どこか寂しそうに目を細めた。

そして、光の繭は刹那の後にはじけ飛び、まるで舞い散る桜の花びらのような残光をまといながら、なのはは大地へと降り立った。

《起動プロセス全て完了。全システム異常なし。見事です》

感慨深くつぶやくレイジングハートの声を聞きながら、なのはは自身の姿をどこか呆然と眺めていた。

身にまとう防護服は、袖口からスカートの先まで純白に染め上がり、胸に結ばれた紅いリボンは決意を胸に握りしめる象徴のごときらめく。

余計な飾りなどどこにもない。それは普段見慣れた学校の制服のようにも思えたが、それはかえって自身の決意の堅さを示すようでもあった。

制服は自身を私から公に切り替える媒体でもある。今までの日常とは隔絶されたこの世界を現在の自分にとっての日常と位置づける最良の選択であると思えた。

（やっと、隣にこれたんだ……）

なのはは、自身の胸にこみ上げる誇らしさを力に、黄金の杖となつたレイジングハートを握りしめ、面を上げた。

鈍色の光をまとう校舎の頂上に、まるで脈動のような魔力を放ちながらジュエルシードはその姿を示した。

先ほどまで胸を打っていた息苦しさはすでに無い。

杖の先端を頭上へと掲げながらなのはは、自分がこれほどまでに冷静でいられることに一種の驚きを感じていた。

「あれがジュエルシードだよ」

「うん、神社で見たのと同じだね」

「そうだね……。起動はしてるみたいだけど、あの時みたいにまだ暴走はしてないみたい。だけど、ゆっくりはしてられない」

「封印魔法、だったよね、どうやって使えばいい？」

なのはレイジングハートの先端をジュエルシードへと向けて掲げた。先の僅かにとがった三日月状の先端部分に覆われた赤い球体がキラリと光り、その中心に《Sealing System ready》という表示が浮かび上がった。

「難しいことは全部後回しにするよ。今は心を静かにして、浮かび上がってくる言葉を唱えて。自分が何をしようとしているのか、どうしたいのか、そのために何が必要なのか。それをただレイジングハートに託すんだ」

デバイスとは魔導師の道具であり、依り処でもあるといわれる。それを今まで補助的にしか使ってこなかったユーノにはその感覚を完璧に理解することはできなかった。しかし、学校の講義で言われた言葉の一つが非常に印象的でもあった。

デバイスは、特に将来インテリジェントデバイスを扱うものにとつてそれは単なる道具ではなく自身の最も近いパートナーとなるだろう。インテリジェントデバイスを扱う上で基本であり最も重要なことであり、ある意味究極と言えることは、純粹にデバイスとの間に確固たる信頼関係を築くことにある。そう、教師は熱を込めて口にしていた。

「レイジングハートを信じて。なのはの声になら、絶対に答えてく

れるから」

それがマシンと人間の融合だった。マシンを従わせるのではなく、共に歩き、共に限界へと挑戦するパートナーとして信じることであれば、それらはおそらくこの世界で最も偉大な魔導師となるだろう。

なのははユーノの言葉に頷き、目蓋を閉じた。

（私の……言葉……レイジングハートを信じる……）

目を閉じれば、そこにあるのは闇。閉ざされた視界はそのまま世界の閉塞を意味し、感覚はひたすら内側へと向かっていく。

内なる世界にはひたすら闇が広がる。それは人の本質がそこにあるというのか、それとも、その闇の中から光を拾い上げようとするのが人であるものなのか。

何も見えない世界には不安があり、恐怖がある。肌の感覚は鋭くなり、脈動する焦げた大気の感触が焦燥を生み出していく。

両手に携えた杖のグリップから次第にこみ上げる熱はまるで冷めていく胸に安らぎを与えようとしているようだった。そして、その中心に一欠片の燈火が芽生えた。

まるでレイジングハートの温もりに感応するように、次第に燃え上がっていくそれは、今自身を包み込む桃色の魔力の源泉だとなのはは直感した。

《リンカーコアへの直接アクセスを確認。マギリンク・サーキット魔力制御回路との同調率規定値をクリア》

なのはは目を見開いた。

「リリカル……マジカル……」

なのはの呟きにレイジングハートは一際強い輝きを放った。レイジングハートの制御回路に注ぎ込まれる莫大な魔力は底を知らず、供給される力はまるで天上より降り注ぐ瀑布が奏でる飛沫のごとくだった。

「封印すべきはいまわしき器……ジュエルシード！」

放たれる魔力の波動は、ジュエルシードが織りなす冷涼なそれとは事なり、まるで、眠り子を暖め包み込むゆりかごのようだとユーノは思った。

「ジュエルシード……封印！」

掲げた杖の先端が桃色に輝き、光は幾重もの帯となって天空に佇む蒼の宝石へと殺到する。

一際輝く蒼い光は、封じられたくないともかくその最後の断末魔か。それとも、望まない目覚めから再び自身に安らぎの眠りを与えられるという安堵の光なのか。

「リリカル・マジカル。ジュエルシード、シリアル20……封印！」

そしてレイジングハートの先端の宝玉に【Sealing】の文字が輝き、ジュエルシードにまわりついていた光の帯が眩い輝きを残し消え去った。

校舎の屋上近くに浮かぶジュエルシードはその姿こそつい先ほどと変わらないが、それから放たれる魔力はなりを潜め、身を刺すような不快な感触は封印魔法が残した桃色の魔力の残滓とともに霧散

してしまった様子だった。

《ジュエルシード格納開始。コンテナに輸送します》

ジュエルシードは安全な状態に完璧に封印処理されたことを確認したレイジングハートは、短くそう言うとなのはから供給された魔力の余剰分を使用してジュエルシードを自らの側に引き寄せた。

レイジングハートの宝玉のきらめきに呼応するようにジュエルシードは風の流れるほどの速度で何となく惚けたように空を見上げるなのはの元へと飛来し、息を吐くまもなくレイジングハートの宝玉の中へと溶け込むように消えていった。

《封印作業、全行程終了。安全確認》

柔らかい機械音を鳴らしながらレイジングハートは終わりを告げた。

「これで、よかったの？」

状況があまりにも早く流れ去ってしまったためか、なのはは当惑した表情を足もとのユーノへと向けた。

ユーノは細長い小動物の首を縦に振り、

「うん、この上ないぐらい完璧に……すごいね、なのはは」

万全な自分でもここまで上手くいったらどうかとユーノは思う。なによりもレイジングハートとなのはの相性は予想を遙かに超えていた。ようやくレイジングハートはパートナーを得ることができた。

それをユーノは喜ぶべきだと自身に言い聞かせる。

《それでは、帰還しましょう。子どもは帰って寝る時間です》

レイジングハートはそう言うത്と自身を杖の形状から元の宝石の状態に戻り、なのはの胸に納まった。その表面に投影された日本の標準時間は、このまま出歩いていれば、不良少年として補導されても文句は言えないことを示していた。

「そうだね、じゃあ、帰ろっか。なんだか、疲れちゃった」

なのははそう言いながら、足もとで自身を見上げるフェレットのユーノを抱き上げ、もう一度校舎を見上げた。

「うん、お疲れ様……ごめんね、無理させちゃって」

「……………謝る事なんてないよ。これは、なのはが決めたことだから」

なのははゆつくりとユーノの頭を撫でた。彼は今までたったひとりで、この世界のために身を削ってきた。生まれ故郷でもなく、つい最近まで何の関わりもなかった自分たちの世界のために、命の危険まで冒して彼はこの世界を守ろうとしてくれていた。

本当に命をかけなければいけないのは誰なのか。それはあまりにも自明なことだった。

にわかに空を覆い始めた雲に月の光が徐々に薄くなりつつある。夜が深さを増し、夜明けは遙か彼方にさえも見えない。夢のうちに終わる夜であれば心がざわめくことはなかっただろう。幸せな夢、

あるいは相でない夢にしかし、訪れたものはいつ終わるとも知れない夕暮れだった。

そして、なのはとユーノはレイジングハートを伴い、暗い夜道を歩き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7012v/>

魔法少女リリカルなのは～Nameless Ghost～（無印編）

2011年11月2日21時04分発行